

富田林の自然

人と生きものがひびきあう
里山をめざして



No.7

2009年3月

富田林の自然を守る市民運動協議会

目 次

子供達と自然

加 藤 寛	1
-------	---

錦織公園とその周辺の野鳥

上 村 賢	2
-------	---

自然環境としての川

高 田 直 俊	9
---------	---

石川における自然回復造成後の昆虫相の推移 ―ライトトラップ調査―

田 淵 武 夫 松 井 敬 子	16
-----------------	----

～ H19 年度「自然環境保全活用調査その6」報告書より抜粋～

	21
--	----

協議会参加団体の活動紹介

(NPO 法人里山倶楽部、「石川あすかプラン」を考える市民連絡会 / 石川自然クラブ、 金剛の自然環境を守り育てる会、富田林の自然を守る会、富田林勤労者山岳会「嶽の会」、 NICE 富田林チーム	31
---	----

平成 20 年度 協議会事業報告	34
------------------	----

錦織公園とその周辺の野鳥観察データ

上 村 賢	39
-------	----

表紙の写真

2月28日、錦織公園で、日本野鳥の会大阪支部の上村賢氏を講師に招いて、野鳥観察会を行った。カイツブリ、マガモ、オオタカ、オオバン、カワセミ、コゲラ、ルリビタキ、エナガなど30種の野鳥を観察した。

紅白の梅が満開に咲き誇る梅の里では、メジロがたくさん梅の花の間を飛び交っていた。

子供達と自然

加 藤 寛

(金剛の自然環境を守り育てる会代表世話人)

不思議な縁で1年ほど前から「金剛の自然環境を守り育てる会」の世話人をさせてもらっています。

それまでは(今でもほとんど変わりませんが)花と言えはお花屋さんに売っているような花しか名前も知らず、道端の草花を見ても「ああ、咲いているな。きれいだな」くらいにしか思いませんでした。草木についても、鳥や虫などについてもそうです。

そんな私ですから、この一年ほど色々な活動(草木・花・鳥・虫等々の自然観察、畑の作業、植樹・里山保全など)を通じて富田林の自然の豊かさ、生き物の種類の豊富さには何度もびっくりさせられましたが、一番びっくりしたのは「(人間の)子供達」です。

世間では、いまどきの子供達は外で遊ばず家でゲームばかりとのイメージで語られることも多いですし、私も漠然とそのような印象をもっていました。子供達は決して外遊びや自然に関心がないということではありません。

畑の収穫祭でどろんこになりながら目を輝かして芋を掘ったり、大根を抜いたりする子供達、びしょびしょになってめだかを追い掛け回してすくう子供達、おっかなびっくりだけど虫やかえるを触りたがる子供達、はたまた野鳥や田畑の畦の草花の名前を次々教えてくれる子供達・・・

確かに事故防止の面もあってなかなか子供達だけで野山を駆け回ったり、池で遊んだりはできにくくなっています。だからこそ子供達が自然に触れ合う機会を作る意味でも「富田林の自然を守る市民運動協議会」の活動は今後ますます重要になってくることでしょう。なにより「身近に自然があること」を守り続けることが一層重要になってくるでしょう。

あせることなく、でも絶えることなく富田林のこの豊かな自然を守り育てて、子供達が自然に触れ合える機会を増やしていき、生き物達に興味を持つだけでなく、草木・花・鳥・虫そして人間がそれぞれ関係しあって生きていっていることを肌で感じてほしいと思っています。そしてそれを次の世代、またその次の世代へと継続していくことがなにより大切ではないでしょうか。

錦織公園とその周辺地域に生息する野鳥

上村 賢

(日本野鳥の会大阪支部)

富田林市の南部地域、とくに大阪府営錦織公園と周辺の住宅地と農耕地、上ー之井堰から川西大橋にかけての石川と周辺の農耕地、佐備川と周辺の二次林と農耕地に生息する野鳥をご紹介します。この地域は、生態系の頂点に位置する猛禽類が少数ながら繁殖しています。その餌となる野鳥を含めた小動物が、多数生息するような多種多様で豊かな自然環境を保全することが大切です。どんな野鳥がどんな環境を好むか、野鳥を観察することを通じて考えてみましょう。

★カイツブリのなかま (カイツブリ目カイツブリ科)



カイツブリ

全長：26 cm 時期：通年
特徴：夏の頭部は、赤茶色とこげ茶色、冬の頭部は、褐色。ケレレレレレとけたたましい声で鳴く。水草を使って水面に浮く巣をつくり、ヒナが孵ると背中に乗せて育てる。鋭い嘴で潜って魚を捕らえる

★ウのなかま (ペリカン目ウ科)



カワウ

全長：82 cm 時期：通年
特徴：鋭く下に曲がった嘴。全身が黒いが顔面の黄色、エメラルドグリーンの虹彩が目立つ。水中に潜って魚を捕らえ、丸呑みにする。

★サギのなかま (コウノトリ目サギ科)



ゴイサギ

全長：58 cm 時期：通年
特徴：五位の位をもつ高貴な鳥。夜行性で、ゴワッゴワッと鳴きながら飛び、別名「夜ガラス」。成鳥は、灰色の羽毛に覆われており、頭部は青灰色で、白いお下げ髪、虹彩は赤色。幼鳥は、褐色の羽毛で白い斑点が多く、虹彩は黄色。別名「ホシゴイ」。



ササゴイ

全長：52 cm 時期：5月～9月
特徴：成長の頭は黒、背中が青みがかった灰色で、ササの形をした白い縁取りに覆われた羽。幼鳥は、頭から背が黒っぽい褐色で、羽には白い多数の斑点。



アマサギ

全長：51 cm 時期：5月～9月
特徴：繁殖期は、頭から首・背にかけての橙色が目立つ白いサギ。繁殖期が終わると全身が白くなる。田畑を耕した後に飛び出たカエルやバッタを捕らえる。



ダイサギ

全長：80～104 cm 時期：通年
特徴：全身が白い大型のサギ。脚は非常に長く、足指が黒。繁殖期には、レース状の飾り羽と首に長い羽毛、嘴は黒。繁殖期以外は、飾り羽と長い羽毛はなく、嘴は黄色。



コサギ

全長：61 cm 時期：通年
特徴：全身が白い小型のサギ。嘴は通年黒く、足指は黄色。繁殖期には背にレース状の飾り羽と白いお下げ髪が出る。片足を水中ですばやく上げ下げし、獲物を追い出して取る。



アオサギ

全長：95 cm 時期：通年
特徴：全身が青みがかった灰色、首の前側に黒い斑点が縦に並ぶ。青黒いお下げ髪。嘴はオレンジ色で長く、脚は長くて褐色。

★カモのなかま (カモ目カモ科)



オシドリ

全長：45 cm 時期：12月～3月
特徴：オスの色彩は、とても美しく派手で、一度見たら忘れられない。腰の金色の羽がよく目立つ。「おしどり夫婦」は、人間の世界だけで、つがいには1年で解消することが多い。



マガモ

全長:59cm 時期:10月下旬～4月上旬
特徴:オスは頭から首が緑、嘴は黄色、白い首輪、胸はこげ茶色、腹部は白い。尾羽の前にクルンと巻いた2枚の羽。メスは全身が茶色で嘴は黒とオレンジ。



カルガモ

全長:61cm 時期:通年
特徴:全身が茶褐色で地味なカモ。オスとメスが同じ色彩。嘴が黒く、先だけがオレンジ色。目をとる黒い線。



コガモ

全長:38cm 時期:10月下旬～4月下旬
特徴:オスはこげ茶色の頭、目の回りが濃いグリーン、腹に白い帯、黄色いパンツ。メスは全身が褐色。嘴は雌雄とも黒。ピュリッ、ピュリッと鳴く。



ヨシガモ

全長:48cm 時期:11月～3月
特徴:オスの頭部は、緑色光沢のある黒で額に白い斑点があり、後頭部の羽毛が伸びて横顔がナポレオンの帽子のように見える。翼の一部が長く、腰から垂れ下がる。メスは全身が褐色。



オカヨシガモ

全長:50cm 時期:10月下旬～4月上旬
特徴:オスは、灰色で胸の小紋の模様が美しく、黒いパンツ。メスは全身が茶褐色で、嘴は黒とオレンジのまだら。



ヒドリガモ

全長:49cm 時期:10月下旬～4月上旬
特徴:オスは、頭がこげ茶色で、額が黄色。背は灰色。メスは、全身が茶色。嘴は、オス・メスとも灰色で先が黒い。ピュルッ、ピュルッと鳴く。



アメリカヒドリ

全長:48cm 時期:10月下旬～4月上旬
特徴:オスは、頭が白色で、目の周りが緑色、黒いパンツ。ヒドリガモとの交雑も多く、純粋なアメリカヒドリは、稀。メスは全身が茶褐色。



オナガガモ

全長:オス 75cm メス 53cm
時期:11月～3月
特徴:オスは、こげ茶色の頭に後頭部に白い剃り込み。黄色いパンツで尾羽が非常に長い。嘴は黒く、両側が灰色。メスは全身が茶色で尾羽が少し長い。嘴は黒い。



ハンビロガモ

全長:50cm 時期:11月～3月
特徴:オスは、白い腹に丸い茶色の模様。頭は濃い緑で嘴は黒くて幅広い。虹彩は黄色。メスは全身が茶褐色でオスと同じ形の嘴をして、黒っぽいオレンジ色。水面を嘴ですくようにしてプランクトンなどを食べる。



ホシハジロ

全長:45cm 時期:11月～3月
特徴:オスは、赤茶色の頭に赤い目、嘴は灰色で先端が黒。黒い胸と白い背と腹。メスは、茶褐色の頭に黒い目、嘴は黒。茶褐色の背と腹。よく潜る。



オオタカ

★タカのなかま(タカ目タカ科)
全長:オス 50cm メス 57cm
時期:通年
特徴:カラスとほぼ同じ大きさのタカで、よく鉄塔や高木の梢に止まって獲物をさがしている。小鳥やカモ、小動物などを襲って食べる。飛んでいるときの翼の裏面は白く、尾羽が長く見える。



トビ

全長:オス59cm メス69cm 時期:通年
特徴:ピーヒョロヒョロと鳴きながら飛ぶ茶褐色のタカ。翼の下面は濃い茶褐色で、尾羽が三味線のぼち型。

★ハヤブサのなかま
(タカ目ハヤブサ科)



ハヤブサ幼鳥

全長: オス41cm メス49cm 時期: 通年
特徴: カラスより少し小さく、猛スピードで飛び、小鳥を捕らえる。飛んでいるときには、翼の先が開かない。止まっているときは、黒いもみ上げが目立つ。



オオバン

全長: 39cm 時期: 11月下旬～3月
特徴: 全身が黒く、額から嘴にかけて(額板)が白い。水中に潜って、水草を抜きあげ、水面で食べる。カモのなかまに横取りされることもある。

★シギのなかま(チドリ目シギ科)



イソシギ

全長: 20cm 時期: 通年
特徴: 川原にいて、チーリーと鳴いて飛ぶ。止まったときには尾羽を上下に振る。体の上面が茶褐色、下面が白く、肩のところまで白い部分が食い込む。



アオバト

全長: 33cm 時期: 10月～5月
特徴: 体の上面が緑色のハト。腹は白く、下腹にかけて黒い斑がある。オスの翼は、赤紫色の部分が目立つ。オアアオ、オアアオと鳴く。群れる。



チョウゲンボウ

全長: オス 33cm メス 39cm
時期: 11月～3月
特徴: ハトより少し大きいハヤブサで、小鳥を捕らえる。オスは、灰色の頭、背は茶褐色。メスは、頭も背も茶褐色。もみ上げは淡い黒。

★チドリのなかま
(チドリ目チドリ科)



イカルチドリ

全長: 21cm 時期: 通年
特徴: 川原の砂礫地にいて、嘴が黒く、脚が黄色いチドリ。体の上面が茶褐色、下面が白、茶褐色の首輪がある。ピオ、ピオやピピピッと鳴く。



タシギ

全長: 26cm 時期: 10月～4月
特徴: 川原や湿地、農耕地の水路など湿ったところを好む、茶褐色と黒の斑模様のシギ。嘴が非常に細長い。

★カッコウのなかま
(カッコウ目カッコウ科)



ツツドリ

全長: 33cm 時期: 5月中旬、8月下旬～9月中旬
特徴: ポポッ、ポポッと鳴く。体の上面が灰色、腹にやや太い縞模様がある。メスは、体の上面が赤褐色の個体もいる。秋にサクラやウメのケムシやイモムシを食べる。

★クイナのなかま
(ツル目クイナ科)



バン

全長: 33cm 時期: 通年
特徴: 黒茶色の体で、額から嘴にかけて(額板)が赤く、嘴の先は黄色。脇腹に白い斑点が並び、尾羽の下部分の白が目立つ。若鳥は、額板が黄褐色で、全身が茶褐色



ケリ

全長: 36cm 時期: 通年
特徴: けたたましい声でケレツ、ケレツと鳴きながら農耕地の上を飛ぶ。嘴は黄色で先が黒い。脚は長く、黄色。

★ハトのなかま(ハト目ハト科)



キジバト

全長: 33cm 時期: 通年
特徴: デデーポッポーと繰り返して鳴く茶色がかった灰色のハト。虹彩は赤い。首の後ろ側に金属光沢の縞模様がある。群れにはならない。

★カワセミのなかま
(ブッポウソウ目カワセミ科)



全長: 17cm 時期: 通年
特徴: 背のコバルトブルーと水色、腹のオレンジ色のコントラストが鮮やかで「飛ぶ宝石」とも呼ばれるほど美しく、人気ナンバー1。嘴が大きく、水の中に飛び込んで小魚やエビをくわえる。オスは嘴が上下とも黒く、メスは上が黒で下が赤いので区別ができる。チーッチーッチーと鳴きながら水面近くを直線的に飛ぶ。

★キツツキのなかま
(キツツキ目キツツキ科)



コゲラ

全長:15cm 時期:通年
特徴:日本で一番小さいキツツキ。背に白いまだら模様。木の幹に垂直に止まり、登りながら虫をさがす。ギーッという歯ざしりのような声や、キッキッキッキッと甲高い声を出す。鳴きながら波状に飛ぶ。



イワツバメ

全長:13cm 時期:4月～9月
特徴:体の下面は白く、腰も白い。尾羽は少しへこんだ形。巣は、急須を縦に半分に割り、持ち手の部分をくり抜いて、天井と壁の面にくっつけた形。



セグロセキレイ

全長:21cm 時期:通年
特徴:水辺で小さな虫を食べる。翼が黒、腹は白。顔は黒くて目の上に白い眉線。ジュジュッ、ジュジュッと濁った声で鳴きながら、波状に飛ぶ。止まると尾羽を上下に激しく振る。日本特産種。

★ヒヨドリ of the family
(スズメ目ヒヨドリ科)



ヒヨドリ

全長:28cm 時期:通年
特徴:頭が灰色、顔は赤茶色。尾羽が長い。ピーヨピーヨと大きな声で鳴く。甘いものが好物で、花の蜜も好んで吸う。深い波型に飛ぶ。

★ヒバリのなかま
(スズメ目ヒバリ科)



ヒバリ

全長:17cm 時期:通年
特徴:農耕地や川原にいて、茶褐色のため、地上にいるときは見つけにくい。春から秋にかけて、複雑な声で鳴きながら飛ぶ。お日様にお金を貸して、「日一歩利取る利取る」と聞く地方もある。

★セキレイのなかま
(スズメ目セキレイ科)



キセキレイ

全長:20cm 時期:通年(秋～冬に多い)
特徴:水辺で小さな虫を食べる。腹が黄色く、チチン、チチンと金属的な声で鳴きながら、波状に飛ぶ。止まると尾羽を上下に激しく振る。



ビンズイ

全長:16cm 時期:10月～4月中旬
特徴:体の上面は緑がかった褐色で、腹には、黒褐色の縦に連なる斑模様。ズイーッと鳴く。林縁部で尾羽をゆっくり上下に振りながら歩いて餌をさがす。

★モズのなかま
(スズメ目モズ科)



モズ

全長:19～20cm 時期:通年(秋～冬に多い)
特徴:大阪府の鳥。鋭く下に曲がった嘴をもつ小さな猛禽。頭は茶色、背は灰色、目を通る線はオスは黒く太い。メスは茶色。高いところに止まって、尾羽をぐるぐると回す。ギチギチギチッと鳴く。

★ツバメのなかま
(スズメ目ツバメ科)



ツバメ

全長:17cm 時期:3月下旬～10月上旬
特徴:額と喉が赤い。幼鳥は淡い赤茶色。体の下面は白い。尾羽は燕尾で、オスのほうが長い。巣は茶碗を縦に半分に割り、壁の面にくっつけた形。



ハクセキレイ

全長:21cm 時期:通年
特徴:水辺で小さな虫を食べる。翼が黒灰色、腹は白。顔は白くて目を通る黒い線。チュチュン、チュチュンと鳴きながら、波状に飛ぶ。止まると尾羽を上下に激しく振る。



タヒバリ

全長:16cm 時期:10月～4月上旬
特徴:体の上面は茶褐色で、腹には黒褐色の縦に連なる斑模様。農耕地や川原の砂礫地で歩いて餌をさがす。止まったときに尾羽をゆっくり上下に振る。

★レンジャクのなかま
(スズメ目レンジャク科)



ヒレンジャク

全長:18cm 時期:12月～4月上旬
特徴:後頭部が尖った形をした紫がかった茶褐色の鳥。ヤドリギの実が好物。尾羽の先が赤い。群れになる。

★ツグミのなかま
(スズメ目ツグミ科)



ルリビタキ♂

全長:14cm 時期:12月~3月
特徴:オスは頭から背、翼、尾羽がブルーでわき腹がオレンジ色。メスは頭から背が褐色で、尾羽がブルー。ヒッ、ヒッ、ヒッとタッ、タッ、タと鳴く。



ジョウビタキ♂

全長:14cm 時期:10月下旬~4月上旬
特徴:オスは頭が銀色、顔が黒く、腹がオレンジ色。翼に白い斑点があり、「紋付き鳥」とも呼ばれる。メスは全身が茶色で、尾羽の下や下腹部がオレンジ色。翼にはオスよりも小さな斑点がある。ヒッ、ヒッ、ヒッと鋭い声で鳴くほかタッ、タッ、タとも鳴く。横枝に止まってお辞儀をし、尾羽を振る礼儀正しい鳥。



ノビタキ

全長:13cm 時期:4月中旬~下旬、9月下旬~11月上旬
特徴:全身が茶褐色で、体の上面は黒い縦に連なる斑模様。農耕地で杭の上に止まり、地上の虫を捕らえてまた違う杭の上に止まることを繰り返す。春に通過するオスは、頭が黒い個体がいる。



イソヒヨドリ

全長:26cm 時期:通年
特徴:オスは頭から胸、背にかけて青く、腹がオレンジ色、メスは黒褐色で腹が濁ったオレンジ色。止まっているときに尾を上下に振る。



トラツグミ

全長:30cm 時期:12月~3月
特徴:黄色と黒のタイガースカラーの大きなツグミ。地上でミズなどの餌をさがすとき、体全体を上下に動かす動作をよくする。昔話の怪物「ヌエ」は、この鳥のこと。



アカハラ

全長:24cm 時期:3月~5月上旬、10月~12月
特徴:頭と背が黒褐色で、腹はオレンジ色で中央は白い。キョロンキョロンツリーとさええる。春は地上で餌をさがし、秋は木の実などを食べる。



シロハラ

全長:24cm 時期:11月上旬~4月上旬
特徴:頭と背が茶褐色で、腹は白褐色で中央は白い。地上で落ち葉をかき分けかき分け餌をさがす。キョキョキョキョーやピチピチピーチーなどと大きな声で鳴きながら飛ぶ。



マミチャジナイ

全長:22cm 時期:3月~4月、10月~12月
特徴:体の上面が茶褐色、腹は淡いオレンジ色で中央は白い。目の上の白い眉が目立つ。春は地上で餌をさがし、秋は木の実などを食べる。



ツグミ

全長:24cm 時期:10月下旬~4月下旬
特徴:頭は黒く目の上の白い眉が目立つ。翼は茶褐色。胸は黒い斑模様が目立つが個体差が大きい。秋から冬は群れになって木の実をよく食べ、春になると地上で単独で餌をさがす。

★ウグイスのなかま
(スズメ目ウグイス科)



ウグイス

全長:オス 16cm メス 14cm
時期:通年
特徴:さえずりは「法法華経」。夏から冬にかけては、チャチャ、チャチャと鳴く。体の色は、「うぐいす色」ではなく、茶褐色。藪の中に入れて、あまり姿が見られない。

★ヒタキのなかま
(スズメ目ヒタキ科)



キビタキ

全長:14cm 時期:通年(近年繁殖)
特徴:オスは体の上面が黒く、目の上の黄色い眉、喉から胸のオレンジ、腹の黄色が鮮やか。メスは体の上面が茶褐色で、背は緑がかった褐色。ホイピーヨと複雑な美声でさえずる。



オオルリ若

全長:17cm 時期:4月中旬~5月上旬、9月下旬~10月
特徴:オスは、頭から背、翼、尾羽が瑠璃色。顔と胸が黒く、腹は白い。メスは体の上面が茶褐色で腹は白い。ピールリーと複雑な声でさえずり、ジュやジェの濁った声が混ざる。



サメビタキ

全長：14 cm 時期：4月中旬～5月上旬、10月
特徴：体の上面は黒みがかった灰色。目の周囲は白い。胸は褐色で腹は白い。横枝に体を立てて止まる。

★エナガのなかま
(スズメ目エナガ科)



エナガ

全長：14 cm 時期：通年
特徴：身体の半分以上が尾羽。ひしゃくの柄が長いのに似ているので、「柄長」。頭の上は白く、目のまわりが黒く、瞳は赤色。肩のあたりがピンク色のおしゃれな小鳥。いつも群れで行動し、ジュリジュリと複雑な声を出しながら、枝から枝へ移って餌を採る。

★メジロのなかま
(スズメ目メジロ科)



メジロ

全長：12 cm 時期：通年
特徴：頭から背、翼がオリーブ色。目の回りが白い小さな鳥。「うぐいす色」は、メジロのこと。花の蜜や熟したカキの実など、甘いものが好き。チーチー、チリチリなど鳴き、群れになる。



アオジ

全長：16 cm 時期：11月～4月
特徴：背が緑がかった褐色、腹が黄緑色のホオジロの仲間。小さな群れで芝生の上で餌を採ることもある。茂みの中でチッ、チッと強い声で鳴く。



エゾビタキ

全長：15 cm 時期：4月中旬～5月上旬、9月中旬～10月中旬
特徴：体の上面は黒みがかった灰色。目の周囲は白い。胸から脇腹にかけて濃い褐色の縦に連なるはっきりした斑模様。横枝に体を立てて止まる。

★シジュウカラのなかま
(スズメ目シジュウカラ科)



ヤマガラ

全長：14 cm 時期：通年
特徴：頭と喉が黒く、頬は白、背と腹がオレンジ、翼は灰色のカラフルな鳥。ツツピー、ツツピーと鳴くほか、ニューニューと鼻にかかったような声で鳴く。昔、緑日でおみくじを引いていた鳥。

★ホオジロのなかま
(スズメ目ホオジロ科)



ホオジロ

全長：16 cm 時期：通年
特徴：オスは全体に赤褐色で、目の上の眉と頬、喉の白とその他の部分の黒との対比が目立つ。メスはオスと同じパターンで全体にくすんだ色彩。繁殖期は「一筆啓上仕り候」と梢でさえずり、繁殖期以外は藪の中でチッ、チッと鳴く。



クロジ

全長：17 cm 時期：12月～3月
特徴：オスは全身が黒っぽい灰色で、下嘴は肉色。メスは全体が茶褐色で、目の上の眉と、頬、喉は、薄茶色。茂みの中でチッ、チッと細い声で鳴く。



コサメビタキ

全長：13 cm 時期：4月中旬～5月下旬、8月下旬～10月
特徴：体の上面は黒みがかった灰色。目の周囲が白く、目の先も白い。胸から脇腹にかけて薄褐色の縦に連なる淡い斑模様。横枝に体を立てて止まる。



シジュウカラ

全長：15 cm 時期：通年
特徴：黒い頭、白い頬、首から腹にかけて黒いネクタイ。オスは太く、メスは細い。青みがかった翼に白い帯、背は黄緑色。ツピーツツピー、ツピー、ジュクジュクなど、複雑な声で鳴く。群れで餌をさがす。



ミヤマホオジロ

全長：16 cm 時期：12月～3月
特徴：後頭部が尖っている。オスは目を通る黒い線とその上と下の黄色が目立つ。メスは目を通る茶褐色の線とその上と下のくすんだ黄色。チッ、チッと細い声で鳴く。

★アトリのなかま
(スズメ目アトリ科)



アトリ

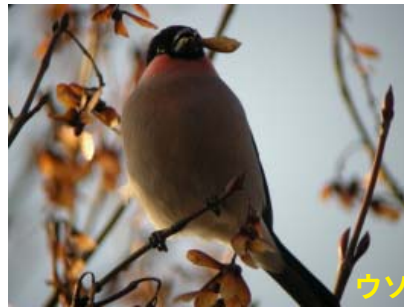
全長：16 cm 時期：11月～3月
特徴：体の上面が黒褐色で、胸と脇腹、翼の一部のオレンジ色が目立つ。腹は白い。群れになって秋は樹上で、冬から春は地上で餌をさがす。



カワラヒワ

全長:15cm 時期:通年

特徴:キリリコロロと澄んだ声で鳴きながら飛ぶ。嘴が太く短く、草や木の種子を食べる。尾羽はM字型でエビフライの尻尾にそっくり。全身が茶褐色で、止まっているときも、飛んでいるときも翼の一部の黄色が目立つ。



ウソ

全長:16cm 時期:11月下旬~4月上旬

特徴:オスは頭が黒く、喉が赤い。メスは頭が黒く喉や腹が淡い褐色。嘴が短い。ヒッ、フーと口笛のような声で鳴き、「嘯く(うそぶく)」という古語が名前の由来。天満宮のうそかえ神事に使われる鳥。

★スズメのなかま
(スズメ目ハタオリドリ科)



イカル

全長:23cm 時期:通年(夏は少ない)

特徴:黄色い嘴、黒い翼の一部に白い斑、青い斑の全身が灰色の鳥。尾羽は長い。キョコキーとさえずる。「お菊二十四」と聞く地方もある。冬は、群れになって餌をさがす。



シメ

全長:18cm 時期:11月~4月

特徴:嘴が太く、ずんぐりした体型で、尾羽は短い。喉の黒、尾羽の先の白、翼の一部の青い部分が目立つ茶褐色の鳥。群れになって餌をさがす。

★ムクドリのなかま
(スズメ目ムクドリ科)



ニュウナイスズメ

全長:14cm 時期:11月~3月

特徴:オスは赤褐色の頭で喉の一部が黒い。頬の一部は黒くない。冬は、目の後ろに白い線が出る。メスは体の上面が茶褐色で、目の上の白い眉が目立つ

★カラスのなかま
(スズメ目カラス科)



スズメ

全長:15cm 時期:通年

特徴:栗茶色の頭で目の周りや喉の一部、頬の一部が黒い。人の営みのないところでは生息しない。夜は大きな群れになって眠る。



ムクドリ

全長:24cm 時期:通年

特徴:全身が黒褐色で、嘴と脚はオレンジ色、顔に白い斑点がある。キュルキュルと鳴き、群れで餌をさがす。

★外来種



ハシボソガラス

全長:50cm 時期:通年

特徴:額がでっぱり、嘴が付け根から徐々に細くなっている。ガーガーと濁った声で鳴く。鳴くときに頭を下げてお辞儀をするような姿勢になることがある。

★幼鳥



ハシブトガラス

全長:57cm 時期:通年

特徴:額がでっぱり、上の嘴の付け根が太く、先が急に細くなっている。カーカーやアーアーと澄んだ声で鳴くが、濁った声も出す。



コジュケイ (キン)のなかま

全長:27cm 時期:通年

特徴:ハトより少し小さい。地面の上で餌をさがすが、木の枝にとまることもよくある。チョットコイ、チョットコイと大きな声で鳴く。



ゴイサギの幼鳥

p.2 参照



オオタカの幼鳥

p.3 参照

野鳥観察データ(リスト)は巻末(p.39)にあります。

自然環境としての川 (社)大阪自然環境保全協会 高田直俊

川の水環境

水域の自然環境のなかで川の水環境条件がほかと異なる点は、当たり前のことながら、水の流れがあるということである。流れは土の粒子や落葉・動物の遺骸などの有機物を運ぶ。これらは流れの速さの違いで河床から運び去られ、また堆積する。また水の流れは「蛇行」という性質を持つ。ガラス窓に吹き付ける雨のしずくが真下に流れずに、左右にふらつきながら流れるのは蛇行のミニチュア模型である。川が下流に向かってまっすぐに流れずに左右にふらつく結果、河川の横断・縦断方向に流速の大小の場所を作り、それに応じて水深の異なる場所である瀬と淵を作り、流速の大小のところで粗い粒子と細かい粒子を底質に持つ場所を河道内に作るのである。

さらに川は時間的に流れる水量が常に変化する。雨の後は当然流量が増えて水位と流速は増え、長く雨が降らないと流量は少なくなって水位と流速は減少する。この流れの時間的変化は、上述の水の流れに起因する地形に大きな変化を与える。普段の流れでは動かない河床の土粒子は、少し流量が増えると細かい粒子が動き出し、さらに流量が増えるとより大きな粒子が動くようになり、冠水域も広がるので、普段水の来ないところの土粒子も移動するようになる。洪水の後では滞筋や河床の状況が変わることはよく見る光景である。なお、「洪水」とは河川用語で大きな水量が流れることを指し、水害の意味ではない。

川の自然は、当然このような流れとその流量の変化の働きを考えないと理解できない。生き物環境の面から川を考えると、流れは川の水深と底質に直接変化を与え、生き物の餌となる有機物を運び、流れによる水の攪乱は酸素を水に行きわたらせる。また「流れていること」を場とする生物が存在する。さらにときどき起きる洪水は、沈殿した古い還元状態にある有機物を新しいものと置き換え、河床の砂礫表面の藻類や堆積した細粒土をこすり落として新しい表面に更新する。また、水際に茂りだした植物を引きはがして地盤面をむき出しに作り直し、植物の遷移・繁茂が進まないようにする。コチドリ・イカルチドリが繁殖し、多肉植物のツメレンゲなどが生育する砂利の河原は洪水による河床の洗濯で維持され、セキレイやサギが餌を取る水際の湿った裸地は洪水が植物をはぎ取って維持されるのである。このように、川の自然は、安定化した地形や河床底質と植物の立地を洪水が破壊し、冠水時の水没に耐えられない植物は殺して排除するという、荒っぽい環境のもとに成り立っている。川の生き物たちは、水の働きとその継続時間、水深や流れの強さの面的分布に応じて住み分けているのである。

河川整備はこの荒っぽい川の性格を和らげる方向でなされてきた。治水と利水のためにダムや水門操作で流れを平準化し、いつも同じような水量・水位で水が流れるように、また河床の土が流されて堤防へその進展が洗掘の形で及ばないように低水路の両側に強いコンクリート護岸を設けてきた。これには親水機能の向上と称して護岸を兼ねたコンクリート階段を作ることが10数年前には流行した。これらによって川はおとなしくなって水路化され、多様で多数の生き物の場であった川の重要な機能が失われていった。さらに、小河川や農業利水に関わる小川の多くは、維持管理のしやすさだけを考えたコンクリート護岸・堤防化や、コンクリート三面張り化された。この景観を雑草がなくなってきれいになり、蚊や毒虫がいなくなってよくなったと考える人が少なくないことも現実である。

治水目的だけを考えると、水の流れ易さと維持管理のしやすさから堅固な護岸と植性を嫌う単調な水路が良い。実際に、どの川も次第にこのような形になってきているが、自然環境面を考えると、すでに行き過ぎていることに気づいている行政担当者は多くなっている。治水と利水に加えて環境保全を取入れられた1997年の河川法改正は、この問題に正面から取り組むことを要求している。川に要求される多面的な機能を相互にどう兼ね合わせるかが課題である。そして、「前例を重んじる」役所の体質には担当者の決断が要求されるが、これには世論を背景にすれば良い。

以下に、野外で散見される事例から、生き物環境からみた川のあるべき姿を考えたい。

水際構造

川の自然を特徴付ける重要な要素は、水域と陸域の連続性であり、水位変動で冠水と干出が繰返され、かつ流水による攪乱を受け、一時的な水たまりを作る移行帯と呼ぶ湿地性地盤の存在である。川の護岸が写真のようにコンクリート化されるとこの機能は失われ、水域と陸域が分断されることはかなりの者が気付いているが、そこまでしなくてもいい所にまでこのような河川整備がなされ、また止めることは容易ではない。**写真-2**のような構造は、誰が見ても川のあるべき姿からほど遠い。



写真-1 水域と陸域を分断する低水護岸



写真-2 三面張りの無生物河川

コンクリート護岸は生き物にも、景観的にもよくないことを知って、しかし、護岸で水際の洗掘に対する安全性を確保したいとして用いられるのがコンクリートブロックを鉄筋で繋いだ接続ブロックで、ブロック間に隙間があり、やがて植性で覆われる。全体として軟らかく地盤の変形になじむので、古くから蛇籠とともに可撓式の護岸や表面保護工として用いられてきた。ただし、**写真-4**のように、最近のものは隙間がほとんどないので、かつてのよさが失われている。



写真-3 接続ブロック：やがて植性が被覆



写真-4 接続ブロック：隙間がないので植性は貧弱

金網に石材を詰めた施工性のよいカゴマットも使われている。これも可撓性であり、従来からあるフトンカゴとともに多孔質で、水際に水生生物の隠れ場を提供する点で好ましい。しかし、狭い川に対する移行帯としての護岸や護岸前面の保護工とする場合には好ましいが、広い川の湿地帯を含む移行帯とするには面的に狭過ぎるので、この背後に洪水時に冠水する移行帯となる地盤面が欲しい。



写真-5 カゴマット



写真-6 フトンカゴ

コンクリートブロック護岸を土で被覆する隠し護岸は設計者の心遣いを感じさせる。**写真-7** は淀川の鶴殿に設けられたもので、この上に被せた厚さ 1 m の表土層はヨシ・オギ帯になっており、斜面の前の水平面は狭いながら移行帯になる。

護岸に沿って時とともに堆積した寄り州が移行帯になっている場合が多い。**写真-8** はその例で、硬い護岸の前面には平水位程度にフトンかごを沈めて、このような移行帯を護岸工事の際に設けるべきである。ただし、植性の繁茂した寄り州は次第に高くなるので、冠水する移行帯機能と川の流水断面(河積)の維持のために、ときには切り下げる必要がある。



写真-7 施工中の隠し護岸: この上に 1m の覆土



写真-8 ツルヨシの生える寄り州

冠水帯

水位上昇で頻繁に冠水する陸域の存在は、前述のように、重要な川の要素である。水没によって陸上植物の生育が抑えられ、湿地性動植物の立地条件が維持される。また流速のある冠水域は地盤面の攪乱・更新を受ける。かなり強い雨が降っても水位が上昇しなくなって冠水帯が大きく失われた淀川では、陸域の切下げで冠水域を取り戻す大規模な工事が行われている。**写真-9** は高槻市域の鶴殿地区の切下げ地で、2001 年から毎年 ha 単位で 4 m の切下げが行われている。切下げた地盤面には植物の根茎を含む表土を置いている。切下げ高は年間で延べ約 70 日は冠水する高さを選んでおり、切下げ後 3 年程度でヨシ原が復元されている。

写真-10 は淀川下流域の低水護岸に沿う寄り州を切り下げた例で、高く堆積した寄り州を平水位に近い高さに切り下げている。ここもすぐに密生したヨシ帯になった。



写真-9 工事直後の鶴殿切下げ



写真-10 工事直後の城北寄り州の切下げ

川は蛇行が固定されて流路が安定化すると、運ばれる土砂のために洪水ごとに堆積地が高くなり、陸域の地形が安定すると植性が発達し、植性が発達すると洪水時に土砂を取り込んで堆積地がさらに高まるということを繰り返す。猪名川において、このように高くなった堆積地の切下げが行われた。**写真-11** は幅約 50 m で長さ約 400 m の大規模な切下げ直後の様子で、ジャリの河原の復元を目標にしていたが、まとまった洪水流がなく、河床の洗濯ができていないため、水際にのみツルヨシが復元した一般陸上草地になっている。以前にはジャリの河原が部分的にあったが、ダムで流れが平準化されて洪水がなくなったために失われている。目標どおりになっていないが、これはこれで悪くはない。



写真-11 平坦化への切下げ直後



写真-12 カラシナの花のあとは密生草地に

水域の復元

沖積低地や氾濫源地帯には、もともと網の目のような流路と小タマリがちりばめられていたことは容易に想像できる。そして川は人間が堤防を作り、流路を掘って水域をそれらの中に閉じ込めたものと言うことができる。堤防や護岸が今のように造られる前はいろいろな形のワンドやタマリ、洪水後の一時水域があり、そこには今では記録のみしか残っていない生き物が棲息していたはずである。河道が単純化した河川においても少しでも生物相の多様性、個体数の復元を目指した取組み事例が各地で行われるようになっている。

淀川では、蛇行の矯正による流路の大幅な改変と河床低下による水域と陸域の分断で消滅したワンド・タマリの復元計画が作られ、大規模な復元工事が行われている。**写真-13** は枚方市域の樟葉地区で洪水時に水没する 8 つのワンド復元計画が実行に移されており、08 年度内に完成する。また、**写真-14** は大阪市旭区の赤川地区で 12 のワンドが復元される。写真は 6 つ目の 08 年度工事のものである。



写真-13 樟葉ワンド



写真-14 工事中の赤川ワンド

猪名川で造園的な設計でワンドが作られていたが、川全体を見て洪水時の流れを考慮していなかったようで、**写真-15**のように合流支川からの土砂流入で埋まり始めている。

川の公園機能

日頃洪水を気にすることもなく、蛇口をひねれば水が出る生活に慣れた都会人に、川が身近な存在であることを知らせようという河川関係者は少なくな。この方向は正しいが、川に人を引き寄せるために親水空間と称する**写真-16**のようなコンクリートと石で作った遊びの空間が作られている。前述の**写真-2**と同様の死んだ川であり、大きな経費をかけて作るべきものとは到底言えない。

地元の反対を押し切って川を化粧石張りにして水草を植えた例は**写真-17**であるが、直後の洪水で流され、粗い環境に耐える草に置き代わった。造園設計者は、さらさら流れる春の小川をイメージしていたのであろうか。川の自然が、時に恐怖を覚える荒っぽいものであることを知らずに失敗する例は多い。川はそのまま野生的公園機能を有しており、生の自然



写真-15 ワンドへの土砂流入



写真-16 無生物化した川



写真-17 化粧石張りの河床と洪水に耐える植性

こそが生き物としての人間が取り戻すべき情緒・危険・安全を含む(生活)能力を磨く場所である。写真-18は猪名川の水辺で、ここは川の一部にできていた浅場に上流の床固めでせき上げられた水を流すだけのもので、このような作り過ぎない環境は子どもと生き物が共存できる野性的な公園機能の場になる。

魚道

川には取水のための堰や河床の洗掘を防ぐための落差工が設けられている。漁業が行われていない小さな川では魚道が設置されていない場合が多く、魚を始めとする水生生物の移動を妨げている。魚道を始めとする水生生物の移動を考えた設備が必要である。堰や落差工の高さが低い場合には写真-19のような斜路型が適当である。これまで造られてきた階段型の魚道の多くは勾配が急で、水たまりが短く、適切と思えないものが多い(写真-20)。また、流れが壁面から離れて宙を跳ぶものがみられる(写真-21)。この状態では魚は遡上できず、また水中に泡が多くなって魚が跳び上がれなくなる。流れが壁面から剥離しないように角に



写真-18 猪名川の子どものための水路



写真-19 斜路型の全面魚道



写真-20 在来型の階段型魚道

丸みを持たせたり、壁面に傾斜を与えたりする工夫が欲しい。最近造られる魚道はかなり工夫されてきているが、魚の行動には未知数が多いことも現状である。さらに、魚道の多くは小型で遊泳力の強いアユ型の魚を対象にしているが、遊泳力の低いもの、大型の魚、カニなども考慮して設置する必要がある。



写真-21 工夫されているが、流れが跳水状態

おわりに

水路化した川の自然を取り戻す試みと実施例が増えているが、その一方で単純な水路化が進められている。川の自然環境の復元の多くは局部的な改善にとどまっており、川全体を考えた上で進めないと成功しない。また、川の自然環境利用の言葉のもとで運動場が造られている。

淀川では河川敷の利用の行き過ぎの反省に立って公園などに利用する際の自然環境との共存を図る方向を、図-1のように淀川河川公園基本計画改定で打ち出され、河川事務所もこの方針に沿った河川敷の利用の是正の方向を打ち出し、実行を始めている。しかし、河川敷を運動場や公園に占用する自治体の担当者からは、川の自然環境に対する意見が全く聞かれないうのが不思議である。

川の自然環境の保全・復元を実現するためには、市民側から具体的意見を出して世論としていく必要を強く感じる。

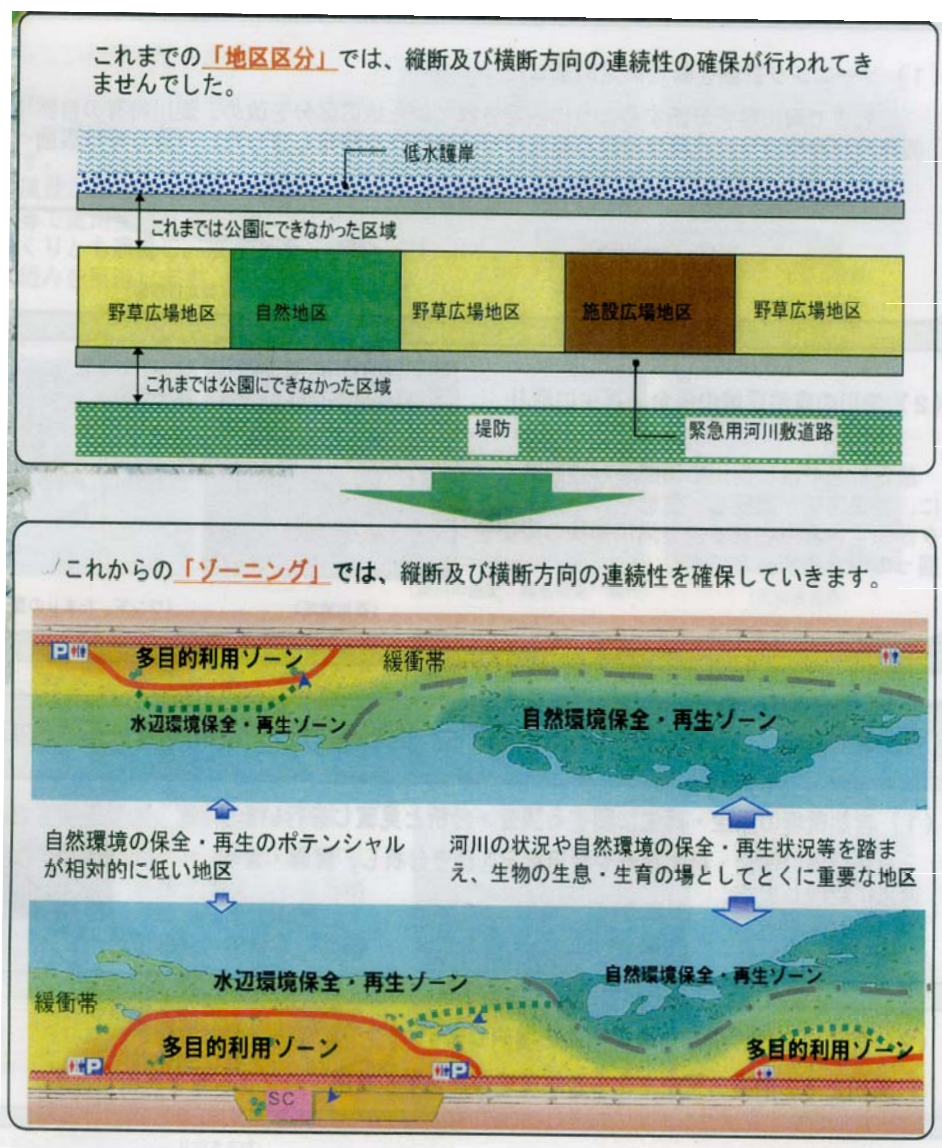


図-1 淀川の河川公園基本計画改定で打ち出されている公園のあり方

石川における自然回復造成後の昆虫相の推移 ーライトトラップ調査ー

石川自然クラブ
田渕武夫 松井敬子

はじめに

石川は金剛葛城山系に源を発し、大和川に合流する全長約 30km の一級河川である。その約 3 分の 1 にあたる高橋（富田林市）から新石川橋（羽曳野市）までの約 11.6km（約 172.6ha）を治水とあわせて河川敷公園にする「石川あすかプラン」と称する大阪府による河川改修計画が進められている。すでに治水のための護岸工事は終了し、「石川河川公園自然ゾーン（自然ゾーン）」と呼ばれる約 1.6km（約 43ha）の区間（河南橋～南阪奈道路）を除いて、両岸はほとんどコンクリートで固められ、直線的な水路となっている。そして、河川敷（高水敷）には都市型公園やグラウンドが造られ、かつて自然豊かであった石川のかなりの部分がその姿を変え、貧弱な生物相となっている。そして現在では「自然ゾーン」だけが比較的、川の自然に近い姿をとどめている。

「自然ゾーン」においても治水工事が行われ、高水敷が平坦化されたが、2002 年 3 月に自然復元工事が行われた。われわれは、2002 年 8 月より毎年、ライトトラップにより、昆虫相の推移を調査している。今回は、2007 年までの 6 年間にみられた昆虫について報告する。

「自然ゾーン」に関する経過

大阪府富田林土木事務所は、1994 年に設立された「石川あすかプランを考える市民連絡会」の要望を受けて、1995 年頃から、「自然ゾーン」の右岸および左岸上流部の一部について、低水路護岸の連節ブロックを用いた隠し護岸が造成された。その後、左岸の残る部分については、低水路護岸を造成しないこととなった。

大阪府南部公園事務所〈当時〉は、1998 年に、学識経験者および地域の自然保護団体の代表による、『石川河川公園「自然ゾーン」検討会』を設置した。そして、1999 年には、その検討結果を踏まえて、「無理につくることなく、身近な自然を創造する」、「じっくり時間をかけてつくり、過ちはすぐに直す」、「地域住民と協働でつくっていく」、「自然の力に任せ、安く手軽にを目指す」、「行政、住民の情報交換を進め、情報の共有を図る」ことを基本方針とする「管理運営計画」¹⁾ を公表した。その後、「管理運営計画」に基づいてつくられた『石川河川公園「自然ゾーン」ワークショップ（2000 年～2003 年）』を経て、現在では、学識者、府民（自然保護団体、近隣の小・中・高校、近隣町会）、行政（大阪府、羽曳野市、富田林市）による、「石川河川公園自然ゾーン計画・運営協議会（2003 年～2004 年の検討会を経て、2005 年に正式発足）」の協議に基づいて、計画・運営が進められている。



図 1. 石川河川公園自然ゾーンの 4 地区

「協議会」は「自然ゾーン」を4地区（右岸をA,Bの2地区、左岸をC,Dの2地区）に区分しているが(図1)²⁾、今回の調査対象であるA地区は、右岸の梅川との合流部から南阪奈道路までの区域（約900m、約9ha）である。この地区は、1995年の治水工事による浚渫土により、高水敷は一面平坦化され、乾燥化が進んでいた。2001年のワークショップにおいて、「日常的な人の利用はしない、生き物のサンクチュアリー」、「自然観察や管理実験の場として利用」の場と定め³⁾、以前の梅川の流路に沿った水路の造成（護岸工事が行われる以前は梅川の石川との合流地点が、現在より約200m下流であった）や地形に2m程度の凹凸をつけるなどの自然復元工事を行うこととし、2002年3月にA地区の自然復元工事が完了した(図2)²⁾。工事完了時点では全面が裸地となっていたが、6月にはイネ科植物とともにオオブタクサおよびアレチウリの芽生えが多数みられ（図3）、その一部は人力により除去された。8月には1年生のイネ科植物を中心とする草原となった。その後、植生が多年生の植物に変化した。2007年8月の優占種はクズであり、比較的多くみられた植物は、ヨモギ、セイタカアワダチソウ、アレチヌスビトハギ、メドハギ、メリケンカルカヤ、セイタカヨシ、アレチハナガサなどであった(図4)。また、掘り下げた水路付近には樹高3m程度のヤナギが数本みられている。

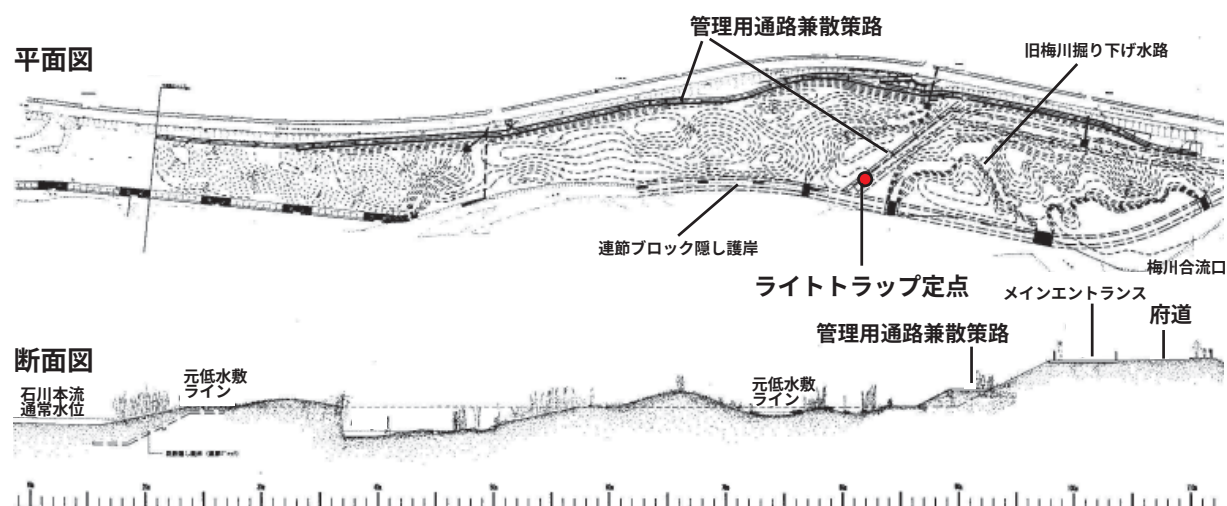


図2. A地区の完成図



図3. 造成3ヶ月後（2002.6.26.）



図4. 造成6年後（2007.8.18.）

調査方法

A地区の中央部に高水敷を横断する園路が造成されている。この園路脇で、本流から約10mの場所にライトトラップの定点を設定した(図2)。ライトトラップは、横幅190cm、高さ190cmのスクリーン(白色の布製シート)を設置し、両面にそれぞれ20Wのブラックライト、捕虫用ライトおよび昼光色蛍光灯を1灯ずつ縦につり下げ、発電機により点灯する装置を作成し、定点に設置した(図5)。

自然復元の造成が実施された2002年から毎年8月中旬以降の新月に近い土曜日を調査日に設定した(2002年8月31日、2003年8月30日、2004年8月21日、2005年8月27日、2006年8月26日、2007年8月18日)。



図5. ライトトラップ

表1. 各年の目別種数および総種数の推移

目	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	総数
トンボ目	0	0	1	2	0	0	3
バッタ目	8	13	8	7	7	7	23
ハサミムシ目	0	0	0	0	1	0	1
カマキリ目	0	0	0	1	1	1	1
カメムシ目	7	20	15	10	11	20	47
アミメカゲロウ目	0	1	0	1	0	1	3
コウチュウ目	10	23	18	12	15	35	64
ハエ目	3	6	2	5	3	2	17
チョウ目	26	50	52	54	61	30	152
ハチ目	2	2	0	2	2	1	9
合 計	56	115	96	94	101	97	320

表2. 各年における上位優占種の推移(単年度において上位5種に入った種の個体数の推移を示した)

種 名	2002年	2003年	2004年	2005年	2007年
ヒメコガネ	4	84	448	239	947
ホシハラビロヘリカメムシ	0	1	0	6	105
ハマベアワフキ	0	2	2	3	20
ドウガネブイブイ	1	1	0	2	18
ツチカメムシ	0	43	56	25	13
コカマキリ	0	0	0	1	13
ヒメマダレミズメイガ	29	0	3	7	10
アオドウガネ	3	4	3	16	8
アカマダラメイガ	1	5	25	4	3
ハネナガヒシバッタ	61	10	0	14	2
クロコガネ	0	6	0	20	2
スギヒメハマキ	36	0	2	1	0
オオホシカメムシ	30	20	20	6	0
オオズケゴモクムシ	28	0	0	0	0
ホシカメムシ科の一種	0	102	0	0	0
ミツカドコオロギ	0	95	0	0	0
Harpalus属の一種(ゴモクムシ亜科)	0	95	0	0	0
オンブバッタ	2	11	22	2	0

19時～22時の間点灯し、ライトに飛来した昆虫のうち、ごく小型のものを除き、できるだけ全数を採集した（但し、2006年については採集数は記録しなかった）。採集した昆虫は、酢酸エチルを用いた毒瓶で処理し、密閉容器に入れて凍結保存し、後日、同定し個体数を計測した。すべての種について標本作製し、専門家の指導のもとに同定した。

結果

総種数は2002年の56種から2003年には115種へと急激に増加し、その後は100種前後で推移した（表1）。2002年から2007年のデータをまとめて目別に見ると、チョウ目が最も多く152種、次いでコウチュウ目の64種、カメムシ目の47種であった。2002年から2007年に確認された昆虫は10目320種で、そのリストを付表1に示した。

表2に2006年を除く各年の優先上位5種の個体数の推移を示した。この中で、ヒメコガネ、ツチカメムシ、ハネナガヒシバツタおよびオオホシカメムシの4種は特に大きな変動を示し、ヒメコガネは2002年は4個体であったが、2007年には947個体と著しく増加した（図6）。ツチカメムシは2002年は0であったが、2004年には56個体と増加し、その後減少した（図7）。これに対し、ハネナガヒシバツタは2002年には61個体であったが、翌年には10個体と急激に減少しその後は少数で経過した（図8）。オオホシカメムシは2002年の30個体から漸次減少し2007年は0であった（図9）。

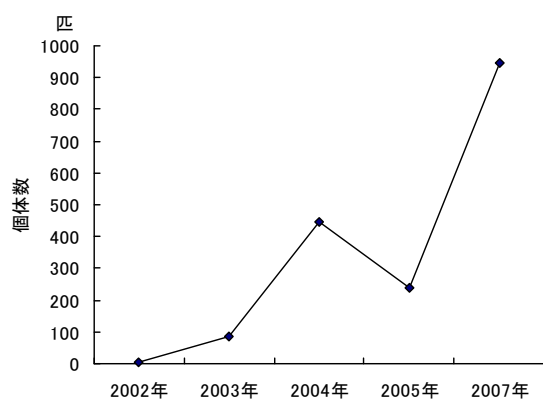


図6. ヒメコガネの年次推移

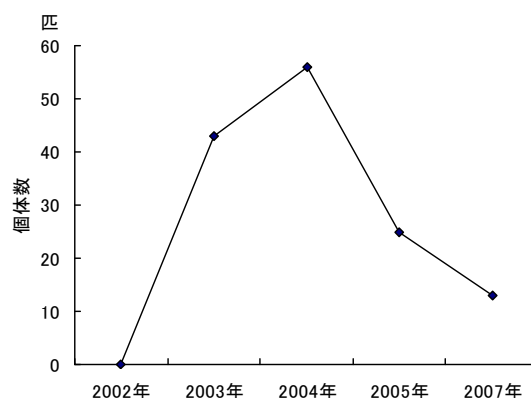


図7. ツチカメムシの年次推移

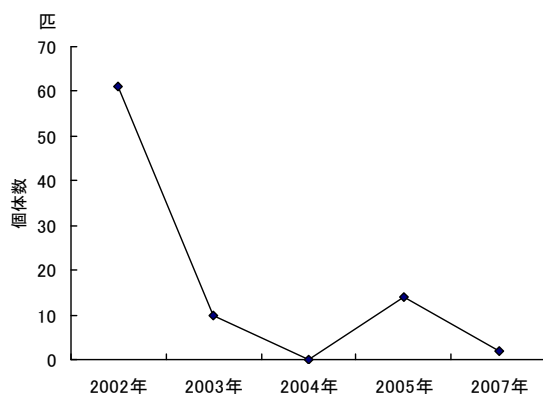


図8. ハネナガヒシバツタの年次推移

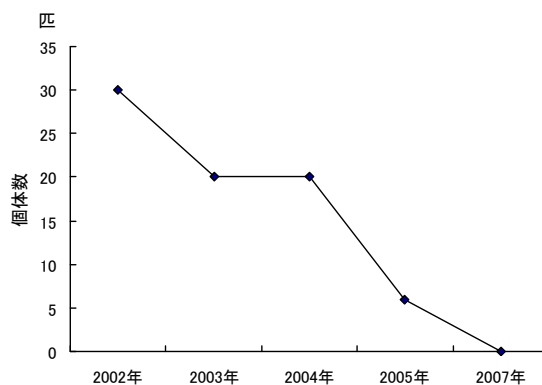


図9. オオホシカメムシの年次推移

謝辞

本調査において、多くのアドバイスをいただき、また、種の同定にあたって多大なご指導、ご援助をいただいた岩崎拓氏ならびに、調査にご協力いただいた小竹瑞枝氏をはじめ石川自然クラブの多くの皆様に深く感謝いたします。

文献

- 1) 大阪府南部公園事務所, (財) 都市緑化技術開発機構; 石川河川公園「自然ゾーン」管理運営計画, 平成 11 年 3 月
- 2) 大阪府南部公園事務所, 株式会社ヘッズ; 石川河川公園「自然ゾーン」ワークショップ運営委託報告書, 平成 14 年 3 月
- 3) 大阪府南部公園事務所, 株式会社ヘッズ; 石川河川公園「自然ゾーン」ワークショップ運営委託報告書, 平成 13 年 3 月

(たぶちたけお, まついけいこ; 石川自然クラブ; 連絡先: 富田林市若松町 4-16-21 〈田渕〉, e-mail: ttabuchi2002@yahoo.co.jp)

この調査報告は、「ネイチャーおおさかスタディーファイル No.2 2008; 大阪自然環境保全協会」から、この調査における全昆虫のリストを除いて転載した。

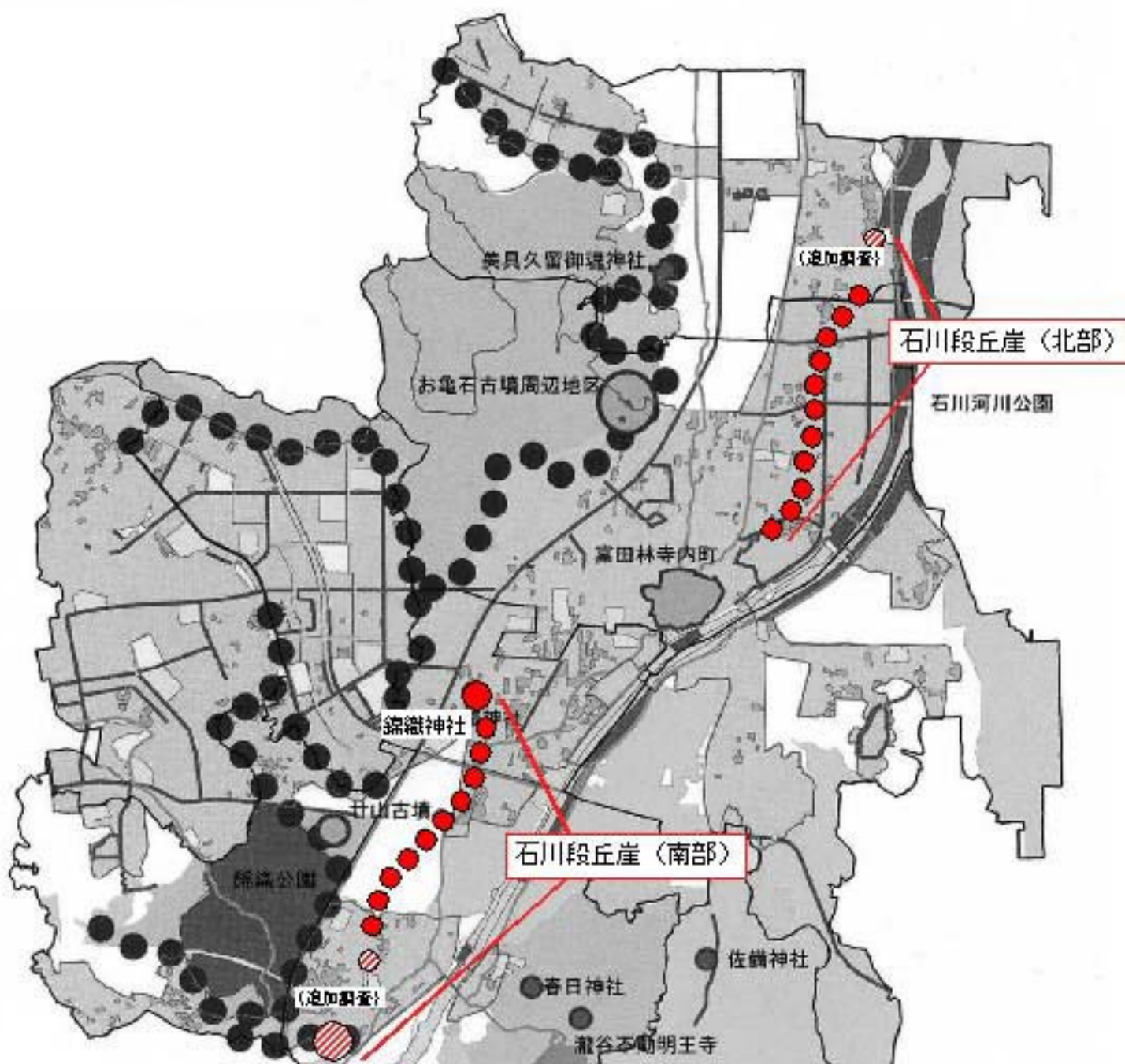
「石川沿い段丘崖の緑」の詳細調査

～H20 年度「自然環境保全活用調査その7」報告書より抜粋～

■「石川沿い段丘崖の緑」の詳細調査

(1) 調査対象地の位置

本調査では、「富田林市緑の基本計画」に「富田林の環境の骨格となる緑」として位置づけられた「石川沿い段丘崖の緑」について、現況の状況や植生、保全すべき自然等について調査を行った。緑の基本計画に位置づけられている段丘崖は、市域北部の川面町～若松町、及び市域南部の錦織神社～大谷女子大学の付近の顕著な緑で、本調査ではそれらに加えてさらに北部の喜志町付近の斜面地、および南部の河内長野市境付近の丘陵部についても調査を行った。



(2) 石川段丘崖の緑・北部

市北部の段丘崖の中で竹林等の緑の存在がはっきりわかる、市域北端の喜志町および川面町～若松町の中小企業団地沿いを踏査した（H20/6/17）。段丘崖の多くは荒れた竹林となっており、ここ数年のうちに駐車場や住宅地、道路用地などとして開発整備され緑が消失している箇所も多く見られた。しかしながら、一部のまとまった緑地（中野-4、若松-5など）では、クヌギ、エノキ、ムクノキなどの広葉樹の大木があり、連続する緑の拠点として貴重な存在となっている。

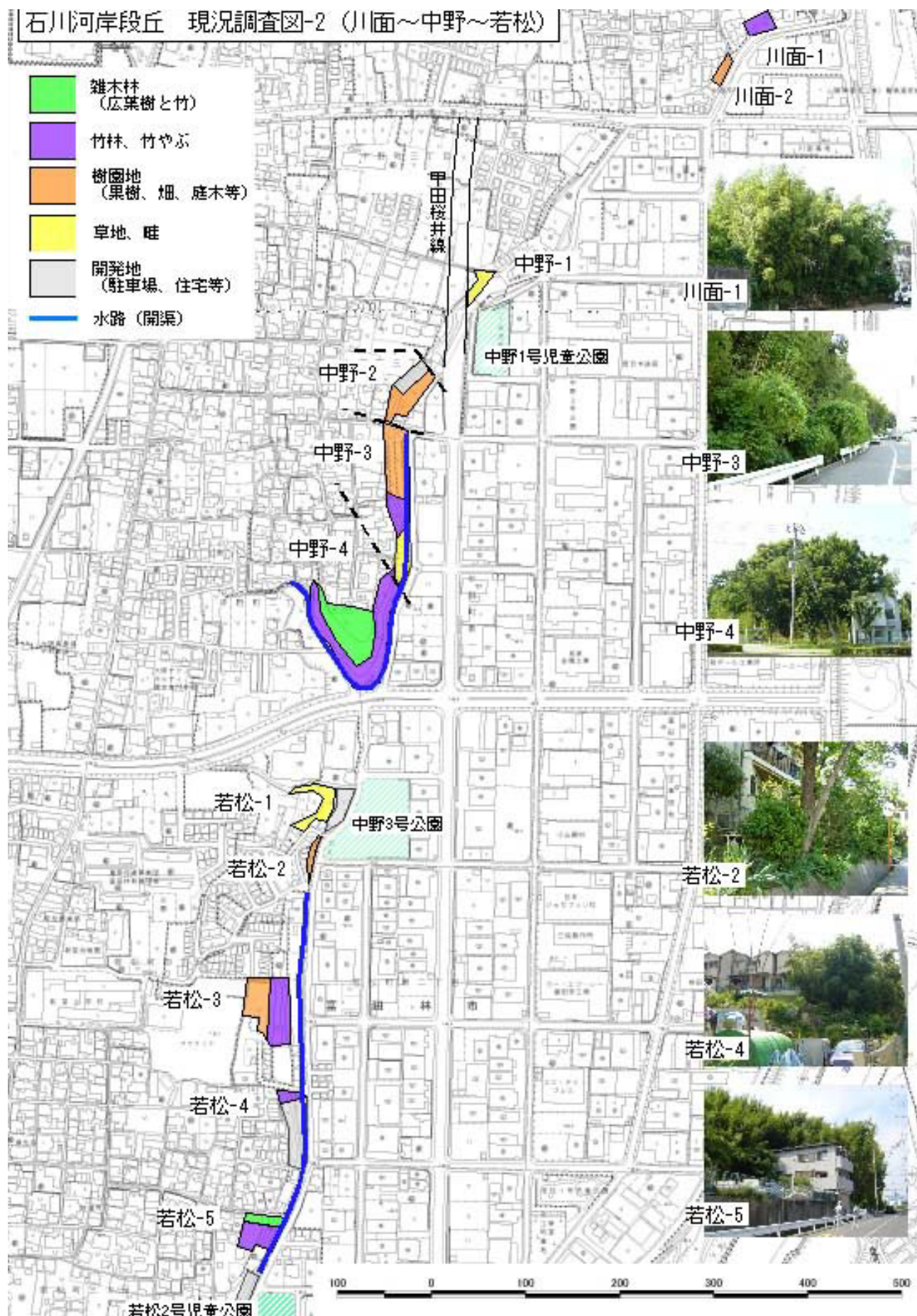
<緑地の現況状況（各緑地の位置は図面1,2を参照）>

- 喜志 -1 立地：水田背後の用水路沿い幅数mの段差。裏側（段丘崖の上）は畑。
植生：ハチクと思われる竹藪
- 川面 -1 立地：川面町の住宅と道路との間の段差。
植生：マダケの竹林。林縁部にはエノキなどの広葉樹も若干見られる。
- 川面 -2 立地：川面町の住宅と道路との間の段差。
植生：斜面を利用した住宅の庭として利用され庭木や花類が植えられている。
- 中野 -1 立地：整備中の道路（甲田桜井線）の法面。反対側は中野1号児童公園。
植生：一度伐採されたマダケの竹藪と草地。
- 中野 -2 立地：畑の中の斜面地。
植生：コンクリートで固められており、植生は見られない。
- 中野 -3 立地：中野町の住宅と中小企業団地の間の段差。
植生：北側半分は梅などの果樹園として利用され、中間部はマダケの竹林、
南側はクズの茂った法面でエノキの大木が数本生えている。
- 中野 -4 立地：中小企業団地沿いで最もまとまった面積の緑地。7～8mの高低差のある小山となっていて、周囲に用水路が流れている。
植生：クヌギやエノキがまざったマダケ林。一部にモウソウチクも見られる。
道路や水路に竹林が覆い被さらないよう伐採の手入れも行われている。
- 若松 -1 立地：段丘崖の下に開発整備された住宅の裏側の水田畦地。
植生：畦として草刈り管理された草地。柿の木も見られる。
- 若松 -2 立地：若松町の住宅と中小企業団地の間の小斜面。
植生：庭木などが植えられているが、エノキの高木なども見られる。
- 若松 -3 立地：駐車場の法面。法面の上は果樹の畑として利用されている。
植生：法面は一度伐採されて低くなった竹藪。上部は草地と果樹園。
- 若松 -4 立地：若松町の住宅の間の法面。下部は新しく開発された住宅地。
植生：マダケの竹藪。下半分は住宅の庭として花壇などが作られている。
- 若松 -5 立地：若松町の住宅と中小企業団地の間の斜面地。面積は広くないが、広葉樹の大木があるため緑のボリュームが感じられる。
植生：ほとんどがマダケの竹林だが、住宅地側へ登る道沿いには、エノキ、ムクノキ、クスノキなどの大木が林立している。

石川河岸段丘 現況調査図-1 (喜志～川面)



石川河岸段丘 現況調査図-2 (川面～中野～若松)



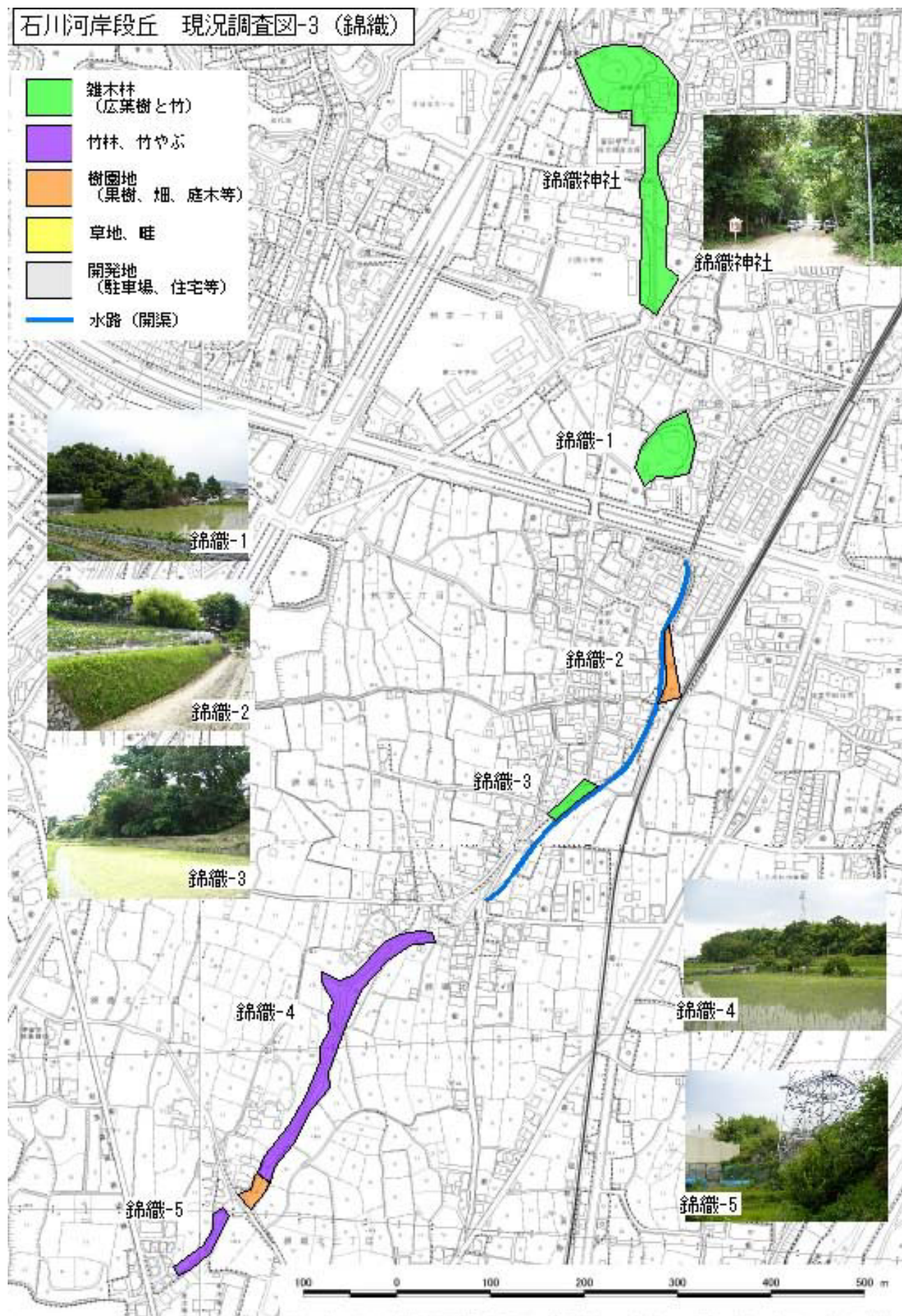
(3) 石川段丘崖の緑・南部

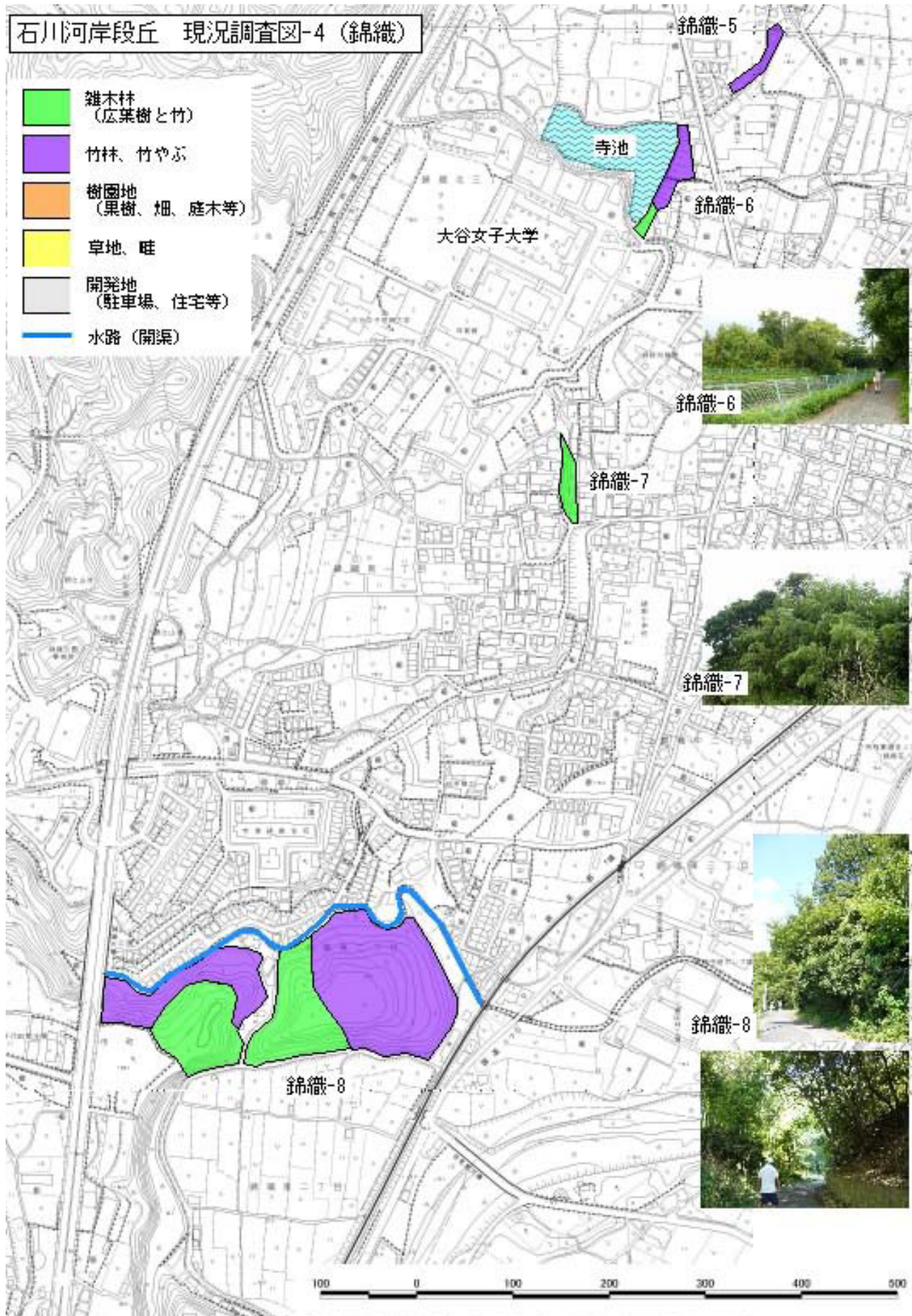
市南部では、断続的に竹林や斜面地として段丘崖がみとめられる、錦織神社付近から河内長野市境の丘陵部の間を踏査した（H20/6/26、8/21）。北部と同様に段丘崖の多くは荒れた竹林となっており、住宅地や農地の間のわずかな空き地として痕跡が認められる箇所も多い。その中で、錦織北二丁目付近の長く連続した竹林（錦織 -4）や、最南部の丘陵部（錦織 -8）は面積的にボリュームがあり、一部にクヌギなどの広葉樹が混じるなど、南部段丘崖の緑の拠点として重要である。

<緑地の現況状況（各緑地の位置は図面3,4を参照）>

- 錦織神社 立地：厳密には段丘崖ではないと思われるが、神社林としてまとまった面積の緑があり、以南につづく段丘崖の緑と連続的にとらえたい。
植生：アラカシやクスノキなどの照葉樹中心の広葉樹林
- 錦織 -1 立地：錦織神社と段丘崖の間に位置する小丘で、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の「新家古墳」にあたる。周辺には水田が広がっている。
植生：アラカシ等の広葉樹林で、一部にヒノキ植林や造園木の植栽、またマダケの侵入が見られる。
- 錦織 -2 立地：荒前水路沿いの小規模な樹林地、および段々になった農地。
植生：用水路沿いは竹やぶや小灌木の植栽地となっている。農地の畦は草刈り管理がされていて、比較的良い景観を保っている。
- 錦織 -3 立地：荒前水路と住宅の間の斜面地。
植生：エノキ、ムクノキ、センダンなどの大木があり、竹も侵入している。
- 錦織 -4 立地：上部と下部の水田にはさまれた長く連続する斜面で、南部で最も顕著にわかる段丘崖となっている。
植生：ほとんどがマダケとモウソウの竹林となっており、若干の手入れもされているようである。
- 錦織 -5 立地：工場や送電線、畑地などにはさまれた斜面地。
植生：ほとんどが竹やぶにおおわれている。
- 錦織 -6 立地：大谷女子大に隣接する寺池の堤防法面。
植生：竹やぶになっているが、ヤナギの大木も見られる。
- 錦織 -7 立地：住宅地内の斜面で、すぐそばまで家屋が建っている。
植生：マダケの竹林で、その中にエノキなどの広葉樹の大木が見られる。
- 錦織 -8 立地：河内長野市境に面したまとまった規模の丘陵地。北側は住宅地、南側は水田で、緑地の北側を水路が流れている。
植生：丘陵の東および北半分はマダケの竹林となっているが、中央部は広葉樹林となっている。アベマキの大木が数本見られるなど、他の段丘崖の緑地よりも里山林としての特徴が強い。

石川河岸段丘 現況調査図-3 (錦織)





■保全施策の提案

(1) 現地調査結果のまとめ

現地調査結果を概観すると、市域北部および南部において断続的につづく各段丘崖は、まとまった面積をもった一団の緑地か、もしくは帯状に残された小斜面かに大きく分けられ、さらにそれぞれの植生によって、緑地の位置づけや今後の保全の方向性を検討していく必要がある。

●一団の緑地

一団のまとまりある面積をもつ緑地は箇所数は少ないが、その植生をみると、竹林の他にエノキ、ムクノキなどの河畔林的な樹種や、クヌギ、コナラなどの里山林的な樹種が混在している。これらは「緑の基本計画」において石川段丘崖の機能として位置づけられた、「自然環境を特徴づける緑」また「自然景観を特徴づける緑」として重要な緑である。

さらに、ボリュームのある緑は、南北方向の自然の連続性ととともに、石川～市街地～農地・里山を結ぶ島状のエコトーンの一つとして重要な役割をもつ。

●帯状の小斜面

段丘崖の多くは、住宅の間や道路・水路の法面として残された帯状の小さな斜面緑地となっている。これらは面積も小さく、竹やぶや雑草地となっていて緑の質は高くないが、「緑の基本計画」に位置づけられている「防災機能を有する緑」として、大規模火災時の延焼遮断機能や、工場地域と住宅地域の緩衝帯としての機能をもっている。

また、これらの小斜面に生育している竹やぶや灌木林は、崖地の土留めとしての機能を有しているため、安易な開発には注意が必要である。

調査した各段丘崖を、上記の視点で整理すると以下のようになり、北部では「中野-4」「若松-5」が、南部では「錦織神社」「錦織-1」「錦織-4」「錦織-8」が、一団の緑地として重要である。

立地・面積	主な植生	段丘崖の位置	
		北部	南部
一団の緑地	A 広葉樹林		錦織神社
	B 広葉樹と竹の混交林	中野-4	錦織-1 錦織-8
	C 竹林	若松-5	錦織-4
帯状の小斜面	D 竹林・竹やぶ	喜志-1 川面-1 中野-3 若松-4	錦織-3 錦織-5 錦織-6 錦織-7
	E その他 (樹園地、草地等)	川面-2 中野-1 中野-2 若松-1 若松-2 若松-3	錦織-2

(2) 自然保全手法の検討

① 主な植生ごとの方針

段丘崖の主な植生は、一団の緑地では、A広葉樹林、B広葉樹と竹の混交林、C竹林 に、帯状の小斜面では、D竹林・竹やぶ、Eその他（樹園地、草地等）に分けられる。これらの主な植生ごとに、今後の管理や保全方針について以下にまとめた。

A 広葉樹林 : 錦織神社

錦織神社の境内林は「市指定保存樹林」になっており、コジイ、スギ、ヒノキ、クスノキ、アラカシなどの約1haのまとまった樹林地である。南部の段丘崖の拠点的な場所となるため、保存樹林として良好な樹林環境を維持継続していく必要がある。

B 広葉樹と竹の混交林 : 中野 -4、錦織 -1、錦織 -8

主に、クヌギ、コナラ、アラカシなどの里山林的な樹種と竹林が混在しており、竹林が拡大傾向にある。このまま放置しておくとうち葉樹が竹に被圧されてしまうと考えられるため、できるだけ早く竹林の伐採や間伐を行うことが望ましい。

C 竹 林 : 若松 -5、錦織 -4

良好な景観の竹林とするため、また隣接する農地や道路へのはみ出しなどの影響を抑えるために、ある程度の間伐を行うことが望ましい。また、一部に広葉樹が生育している箇所（若松 -4 のエノキ、ムクノキなど）では、周囲の竹を伐採して広葉樹を活かしていきたい。

D 竹林・竹やぶ（小斜面）

: 喜志 -1、川面 -1、中野 -3、若松 -4 錦織 -3、錦織 -5、錦織 -6、錦織 -7

良好な景観の竹林をつくり、隣接する住宅や道路、農地、水路等への影響を抑えるため、Cと同様に定期的な間伐や伐採を行うことが望ましい。防災面の機能や斜面地の安定を維持するために、小面積でも裸地化せず緑を保全していくことが必要である。

E その他（樹園地、草地等）

: 川面 -2、中野 -1、中野 -2、若松 -1、若松 -2、若松 -3 錦織 -2

果樹園や畑、庭木植栽などに利用されている箇所は、適当な管理を行うことで緑地としての機能が維持されると考えられるが、新たな裸地化やコンクリート舗装などが行われないよう、すでに開発された箇所を含めて緑化のPRや誘導を行うことが望ましい。

② 広報PRと開発協議

一団の緑地であるか帯状の小斜面であるかを問わず、石川段丘崖の機能や重要性はまだまだ市民には知られていない。そのため、これまでに開発されて消失した緑地があり、また一部では崖くずれなどの災害が生じた箇所もある。

今後は、「緑の基本計画」に位置づけられた緑地としての意義を市民に積極的に広報PRするとともに、安易な開発に一定の抑制がかかるよう、開発の際には緑化や防災について、市や地域住民と協議を行っていくことが必要である。

(3) 施策提案

<モデル地区の設定と市民協働による保全>

石川段丘崖は長距離にわたって断続的に立地し、各緑地の現況状況も様々であるため、全体としての自然保全がなかなか困難である。そこで、北部の「中野-4」地区を石川段丘崖保全のモデル地区に設定し先導的に保全管理を行っていくことで、段丘崖の緑の重要性のPRや、今後の保全手法の検証を行うことを提案する。

● 「中野-4」地区の現況状況と位置づけ

北部の段丘崖の中でもっともまとまった面積があり、植生も竹林だけでなく、クヌギ、コナラなどの広葉樹も見られる箇所である。また、市史跡「喜志城跡」周辺の「中野北遺跡」および「中野遺跡」にまたがって立地しており、史跡保護の視点からも保全が望まれる。

さらに、土地所有者や地元町会の関心が高く、現在の荒れた状態を改善したい意向が市にも伝えられており、地元住民との協働で保全管理を行うモデルケースとして位置づけることができる。

● 保全管理の進め方（案）

・ 協議の場の設定

地元町会や土地所有者との協議の場を設定し、現在の問題点と今後の管理方針について相談・検討する。

- 竹林の管理方法について（間伐、タケノコ掘り、定期的な草刈りなど）
- 広葉樹の管理方法について（樹種・本数等の調査、周辺の竹伐採、間伐など）
- その他（散策道づくり、野草の植栽、自然観察など）

・ 現地視察

実際に現地の樹林に入り、竹の状況や広葉樹の調査を行うとともに、その他の整備について現地を見ながら意見交換する。

・ 竹林管理の試行実施

視察にもとづいて試験的に一部の竹伐採を行った後、市の広報などで呼びかけて本格的な管理作業を行う。

・ 竹林管理の講座開催

地元の経験者や外部講師を招いて、竹林管理の基礎知識や管理技術について学び、実習を兼ねて現地での間伐活動を行う。

・ 定期的な管理の継続

毎年の定例活動を決め、無理のない範囲で継続的な管理をすすめていく。

・ 管理組織づくり

土地所有者、町会、市、市民運動協議会、学校など関心のある人が参加する「協議会」などを組織し、活動の定着を図る。



＜協議会参加団体の活動紹介＞

活動紹介) 特定非営利活動法人 里山倶楽部

里山倶楽部は、「好きなことして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」をコンセプトとして、里山の保全管理や環境教育に関するさまざまな事業を行なっています。会員は約250名。活動グループのひとつ「とんびくらぶ」では、龍泉寺近くの果樹園で里山初心者が楽しみながら草刈りなどの手入れや果物の収穫などを行なっています。

竜泉の果樹園の手入れ→



講座および自由参加活動

- 里山の学校（里山基礎講座） ●森林ゼミ（人工林管理） ●里林班（雑木林管理）
- 窯の穴（炭焼師養成講座） ●弘川千年の森（協働事業） ●里山キッズクラブ（子供対象）
- とんびくらぶ（山遊び・山仕事体験） ●桜とりすの森（ニュータウンでの緑化活動）

生産販売事業

- 里山事業部（森林作業請負、炭・薪等の生産販売）
- 里山自然農場（無農薬米、野菜等の生産販売）
- 里山バザール（さと山パン、竹酢液、竹炭焙煎珈琲、野草のリース等の販売）

まちづくり・研究活動

- 里山バイオマス事業部（薪炭林のエネルギー化研究）
- 里山環境教育オフィス（ワークショップ等の受託事業）

連絡先：寺川裕子，〒584-0024 富田林市若松町4-20-6，TEL/FAX 0721-25-3128

活動紹介) 石川あすかプランを考える市民連絡会／石川自然クラブ

石川自然クラブは、石川の自然について学び、考え、調べ、遊び、行動することを通じて、石川本来の川の流れや河原の自然環境をとりもどし、地域の暮らしと共生する自然豊かな川づくりを行なうことをめざして、以下のような活動を行っています。

- ①石川の自然や生きものについての学習・観察・調査
- ②子どもたちが石川の自然を体験できる機会の提供
- ③石川の自然についてのPR活動
- ④石川の自然にふさわしい整備や管理についての共生型技術の検討・提案
- ⑤地域の人たちや市民団体、行政や専門家との協働の場づくり
- ⑥石川流域におけるネットワーク活動

毎年恒例の「石川流域フォーラム」では、1年間の活動成果を生きもの標本や写真・パネル展示等で紹介しています。また、「石川こども自然隊」では地域の子どもたちとともに石川の自然を体験し、「石川自然公園自然ゾーン計画運営協議会」では、行政や地元町会と協働して石川の自然についての様々な提言や取組みを行っています。

地元住民と行政の協働で行った竹林伐採作業→



連絡先：笠原英俊，〒584-0086 富田林市津々山台1-5-1，TEL/FAX 0721-29-7894

活動紹介)

金剛の自然環境を守り育てる会

平成19年3月に設立され丸2年を経過しようとしています。

錦織公園にほど近い寺池台三丁目を拠点とし、わずかに残る里山風景を保っていき、次の世代に継承していけるよう活動を行なっています。

今年度の主な活動内容は、

- ・里山を臨む散歩道（寺池3号公園内）に花壇をつくる
- ・山際の畑で芋や大根などの野菜を作り地域の子供たちにも参加してもらっての収穫作業では、あぜの草花や生き物の観察と共に行なう
- ・1月には公園への植樹、シダレザクラ他10本、ヤマブキ、エニシダ、アジサイなどの低木約40本、カキノキ1本を地元寺池台小学校の生徒の皆さん役180名にも参加していただけて行なう
- ・地産地消の大切さを伝えるためのキャンペーンとして月に1度の公園での朝市（野菜・果物）を行なう（5月より7回）
- ・その他年に2回公園の清掃、自然クラフトの講習などを行なう



ジャガイモ植え付け体験

連絡先：〒584-0073 富田林市寺池台三丁目18-41
事務局 十川 明子

活動紹介)

富田林の自然を守る会

協議会主催で行われた里山保全作業（富田林「里山ホリデー」）、自然観察会、昆虫ウォッチング、野草を食べる会、里山クラフト、どんど焼きともちつきなどを主体的に取り組みしました。

協議会の主催活動以外の取り組みとしては、「タケノコ掘り」、「国際ワークキャンプ（NICEと共催；協議会は協力参加）」、「里山コンサート」の開催、「NICE週末キャンプ」、「自然環境市民大学（大阪自然環境保全協会）」、「パンゲアグループ」、「保育園の遠足」、「小学校野外学習」、「学童保育」、「地域の子供会」、中央公民館の講座「里山で遊ぼう」、「富田林市職員研修」などの受け入れ、水利組合に協力しての溜池の土手の草刈り、水路脇の樹木の伐採、南原の栗園の手入れなどを行いました。

連絡先：田渕武夫

〒584-0024 富田林市若松町4-16-21
TEL/FAX 0721-24-7960



学童クラブの昆虫採集

活動紹介) 富田林勤労者山岳会「嶽の会」

日本勤労者山岳連盟は2006年2月19日に労山自然保護憲章（1～9章）を制定しました。

憲章には、「登山活動を通して、自然を見る目をやしない、自然の変化をとらえ、山と地球規模の環境保全に寄与します。」「クリーンハイキング運動に参加し、登山者のモラルを高め、山からゴミを一掃します。そこでつちかった力で、さらに多面的な自然保護活動を広げてゆきます。」「自然を傷つけない登山技術を求め普及していきます。」等があり、山の自然と共存しながら、登山文化の継承発展を目指しています。

私たち「嶽の会」も毎年6月、クリーンハイキング(金剛山)を取り組み、捨てられているゴミの多さに驚き、また普段登っている多くの山で人為的な自然破壊が進んでいる状況を見てきました。

自然保護・環境保護のために、まず身近な自然から見直そうと富田林の自然を守る市民運動協議会の活動に参加しています。



観察路の修復（杭づくり）



観察路の修復（階段づくり）

＊富田林の自然を守る市民運動協議会に参加する団体としての活動

09年2月1日(日)午前10時から19名（嶽の会から8名）の参加で、自然観察路等の修復作業を行いました。

（自然保護担当 上角 敦彦）

活動紹介) NICE チーム富田林

（特活）NICEは、日本、東アジアで行われている国際ワークキャンプの主催、紹介、またより身近な活動として、一泊二日で行う週末ワークキャンプの運営をしています。わたしたちチーム富田林は、月に一度奥の谷を訪れ、手作りのみかん小屋に泊まりながら、自然を守る会の皆さんと共に里山保全活動に励んでいます。どんど焼き、梅狩り、田植えなど、普段は体験することのないような季節の行事にも参加させてもらい、大阪とは思えない、豊かな大自然を満喫しています。

NICEと奥の谷とのお付き合いは、今年でなんと10年目を迎えました！1月には、汗と涙の結晶？！である観察路の開通式も行われ、少しずつですが成果も目に見える形で残るようになってきています。去年に引き続き、自分たちで使うもの（食べるもの）は手作りで！をモットーに、自然を守る会の皆さんのサポートのもと、お米、しいたけ、囲炉裏に使う竹炭まで、手作りしました。わたしたちチームにとって、大事な大事な第二の故郷です。来年度から運営メンバーが大きく変わりますが、これからもどうぞよろしくお願いします。

連絡先：NICE 関西オフィス

TEL： 06－4804－9045



観察路の開通式

2008 年度 協議会事業報告

2008年度に協議会が行った活動を以下のように分類することができる。

(1) 生態系保全活動

- ① 雑木林の林床管理（下樵）、②人工林（スギ・ヒノキ林）の管理（間伐、枝打ち）、③竹林管理（雑木林および人工林へのタケの侵入防止）、④草地管理（休耕田とその畦、ため池の土手など）、⑤水生生物の保護と育成。

(2) 自然とふれあい、自然と親しむ活動

- ① 観察路づくり、②自然観察（植物・昆虫）、③水の生きものと遊ぶ、④竹炭焼き、⑤シイタケ栽培、⑥果樹栽培、⑦野草を食べる、⑧里山クラフトづくり、⑨どんど・餅つき。

(3) 調査・提言活動

自然環境活用調査

これらの活動について、具体的に、以下に報告する。



p.4 参照

1. 自然環境保全の活動

(1) 里山管理作業

富田林「里山ホリデー」と称して、下表のような活動を行った。

いずれも午前10時～午後3時頃、場所：奥の谷、参加費：200円（小学生以下は無料）

回	開催日	参加人数		作 業 内 容
		大人	子ども	
1	5月25日（日）	6人	0人	果樹の丘の刈草集め、「NICEな森2004」および「NICEな森2003」の間伐（ヒノキ各1本）、シイタケ原木の置き場所の作成と2007年植菌木の整理
2	6月22日（日）	雨 天 中 止		
3	9月14日（日）	8人	1人	「NICEな森2001」の間伐
4	10月 5日（日）	雨 天 中 止		
5	12月 7日（日）	21人 (内NICE 6人は 参加費徴収せ ず)	10人	ミカンの収穫
6	1月25日（日）		2人	コナラの伐採（シイタケ原木）
7	2月 8日（日）	26人(参加費徴収 せず)	2人	水路脇の樹木の伐採（水利組合と初芝富田林高、NICEと協働）
8	3月22日（日）	8人	2人	シイタケの植菌

(2) 生きもの水辺づくり

日時：6月1日（日）10時～15時頃、場所：奥の谷の「水の生きもの池」、参加費：200円（小学生以下は無料）、参加者数：大人40人（内公民館行事の19人は会費徴収せず）、子ども28人であった。

午前中は、子ども達を中心に、水の生きもの捕りを実施（メダカ、オタマジャクシ、アメリカザリガニなど）。午後は、スタッフを中心に「水の生きもの池」の補修（道路沿いの溝さらえと畦にできた穴の補修）。

なおこの日は、富田林市中央公民館の行事「里山で遊ぼう」（子ども14人、大人19人）が合流した。

(3)自然観察路の整備

日時：2月1日（日）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：200円（小学生以下は無料）、参加者数：大人17人（うち「嶽の会」から大人8人）、子ども2人。

次の2ヶ所の観察路の補修を行った。

①果樹の丘の奥の階段

②みかん小屋の西側斜面の、2004年の国際ワークキャンプで造成した階段

この行事は、勤労者山岳会「嶽の会」が中心で計画し、協議会の主催行事として実施した。

2. 自然観察・昆虫ウォッチング

(1)自然観察会

主として、植物観察を中心に、下表のような日程で実施した。

いずれも午前9時～午後1時頃、参加費：200円（小学生以下は無料）

回	開催日	場所	参加人数		備考
			大人	子ども	
1	4月6日（日）	奥の谷	16人	8人	観察した開花植物（草本）：ショウジョウバカマ、コスミレ、シハイスミレ、ノジスミレ、タチツボスミレ、シュンランなど38種。（木本）：オオシマザクラ、ヤマザクラ、ウワミズザクラ（蕾）、コバノミツバツツジ、ヤマツツジなど12種。
2	5月6日（休）	奥の谷	18人	7人	観察した開花植物（草本）：シャガ、カサスゲ、タツナミソウ、ニガナ、ノアザミなど51種。（木本）：アカマツ、ノダフジ、キリ、クサイチゴなど16種。
3	6月14日（土）	奥の谷	13人	0人	
4	9月7日（土）	奥の谷	15人	4人	観察した開花植物（草本）：アキノタムラソウ、オトギリソウ、キンミズヒキ、ゲンノショウコ、ヘラオモダカ、センニンソウ、ツリガネニンジン、ヌスビトハギ、ヒシ、ヤブラン、ワレモコウなど57種。（木本）：マルバハギなど。
5	10月19日（日）	錦織公園	10人	2人	観察した開花植物（草本）：アキノタムラソウ、オミナエシ（河内の里）、ガマ（河内の里）、ヒメガマ（河内の里）、ゲンノショウコ（河内の里）、ツリガネニンジン、ヒヨドリバナ、ボントクタデ（河内の里）、ワレモコウ、シラヤマギク（河内の里）、アケボノソウ（河内の里）、アキチョウジ（河内の里）、オケラ（河内の里）、ナンバンギセル（河内の里）など44種。

(2)昆虫ウォッチング

日時：7月19日（土）15時～21時頃、場所：奥の谷、参加費：300円（小学生以下は無料）、参加者数：大人12人、子ども12人。

ネットによる自由採集、バナナトラップ、ライトトラップ、夜間ルート観察を実施した。

観察または採集した昆虫は下記の通りであった。

自由採集：オオシオカラトンボ、アオイトトンボ、ウスバカゲロウ sp、ショウリョウバッタ、ハグロトンボ、オオカマキリ（幼虫）、ササキリ sp（幼虫）、ショウジョウトンボ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、コクワガタ、キリギリス sp（幼虫）、カミキリムシ sp-1、ハンミョウ sp、カミキリムシ sp-2、ハラビロトンボ、マメコガネ、キチョウ、イナゴ sp、タマムシ、クロアゲハ、ツチイナゴ、オンブバッタ、ハグロトンボ、クロタマムシ、チョウトンボ、ギンヤンマ、ゴマダラチョウ、カナブン、コムシジ、オニヤンマ。

夜間ルート観察：ミヤマクワガタ、トモエガ sp、キマワリ、カミキリムシ sp、コクワガタ、ヒグラシ。

ライトトラップ：コフキコガネ、コガネムシ、ヒメコガネ、コロコガネ、ニイニイゼミ、ケラ、ハンミョウ。

(3)野鳥観察会

日時：2月28日（土）9時～13時頃、場所：錦織公園、参加費：200円（小学生以下は無料）、講師：上村賢氏（日本野鳥の会）、参加者数：大人17人、子ども1人。

観察した野鳥：カイツブリ、カワウ、アオサギ、マガモ、カルガモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、オオタカ、オオバン、キジバト、カワセミ、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス（声）、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。



p.5 参照

3. 自然環境講座

(1)春の野草を食べる会

日時：4月29日（祝）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：300円（小学生以下は無料）、参加者数：大人27人、子ども14人。

みかん小屋周辺の野草を摘んで調理して食した。

メニュー：ヨメナご飯、種々の野草の天ぷら、トトキの和え物、ヨモギ団子など



p.6 参照

(2)自然クラフト(つる細工)

雨天のため中止。

4. 米づくり講座

2008年度から、奥の谷の水田約300㎡を石垣氏から借地し、米づくりを実施することになった。

(1)田植え

日時：6月7日（土）10時～14時頃、場所：奥の谷、参加費：200円（小学生以下は無料）、参加者数：大人23人、子ども7人。

午前中、全員で田植えを行った。昼食はカレーライスを作り、楽しく食べた。予定より少し早めに解散した。

(2)稲刈り

日時：10月11日（土）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：200円（小学生以下は無料）、参加者数：大人21人(NICEを含む)、子ども2人。

NICE週末キャンプが合流して稲刈りを行った。NICEの参加者は14名であった。稲刈りおよび穂だ掛けを終了した。

(3)稲こぎ(脱穀)

日時：11月1日（土）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：200円（小学生以下は無料）、参加者数：大人13人（うちNICE4人）、子ども5人。

NICE週末キャンプが合流して稲刈りを行った。稲刈りおよび穂だ掛けを終了した。

5. 国際ワークキャンプ

「国際ワークキャンプ大阪太子・富田林2008」が、富田林の自然を守る会、太子町葉室里山クラブ、

NICE（日本国際ワークキャンプセンター）の共催で、8月15日（金）～29日（金）の間、奥の谷と太子町山田で実施された。8月15日（金）～22日（金）の間は、富田林の自然を守る会が担当して、奥の谷で開催された。

8月16日に歓迎会が行われ、富田林市から産業環境部部長、みどり環境課長、みどり公園係長が来賓として参加、市長からのメッセージが紹介された。

外国人6人（韓国、フランス、スイス、ドイツ、ベルギー、オーストリアから各1人）、日本人6人（埼玉、東京、大阪2人、滋賀）の12人が、奥の谷の小屋（みかん小屋）に宿泊して、ヒノキ林の間伐（約50本）および雑木林の下樵り（約500m²）を実施した。

その他スタッフを含め、地元などから、延べ90人の参加があった。協議会からキャンプ運営のための援助を行った。



p.6 参照

6. 交流会

(1) 忘年会

日時：12月20日（土）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：300円（小学生以下は無料）、参加者数：大人16人、子ども5人。

午前中は、モウソウチクの伐採を行った。午後は休耕田の広場で、鶏鍋で交流した。

(2) 新年会（どんどこもちつき）

日時：1月17日（土）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：300円（小学生以下は無料）、参加者数：大人49人、子ども21人。

最初に書き初めを行い、続いて、どんどこ焼きを行った。どんどの準備は、前日、富田林の自然を守る会の世話人などで行った。その後もちつきを行い、きな粉餅、あんこ餅、おろし大根餅、雑煮を作り、参加者みんなで楽しく食べた。餅は、2升臼を4臼、計8升ついた。

7. 冊子「富田林の自然」No.7の発行

下記の内容で、「富田林の自然」誌No.7を発行した。

下記の内容で、「富田林の自然」誌No.7を発行した。

「子供達と自然（加藤 寛）」、「錦織公園とその周辺の野鳥（上村 賢）」、「自然環境としての川（高田直俊）」、「石川における自然回復造成後の昆虫相の推移ーライトトラップ調査ー（田淵武夫、松井敬子）」、「H19年度「自然環境保全活用調査その6」報告書より抜粋」、「協議会参加団体の活動紹介（NPO法人里山倶楽部、「石川あすかプラン」を考える市民連絡会、竜泉里山クラブ、富田林の自然を守る会、富田林勤労者山岳会「嶽の会」、金剛の自然環境を守り育てる会、NICE富田林チーム）」、「平成20年度協議会事業報告」、「錦織公園とその周辺の野鳥観察データ（上村 賢）」。

8. 自然環境保全活用調査 その7

富田林市がNPO法人里山倶楽部に委託した調査に、協議会が合同して調査に参加した。

2008年度の調査は、「富田林市緑の基本計画」において、「富田林市特有の地形の記憶をとどめる緑であり、かつ、生態的にも重要なエコトーンであることから、今後、保全に向けて検討します」としている「石川の段丘崖の緑」について調査し、保全手法の検討を行うことを目的として実施された。

現地調査は、6月17日（北部の段丘崖）、6月26日（南部の段丘崖）、8月11日（汐ノ宮地域の段丘崖）に実施した。

次のような内容の報告書が作成された。〈1. 緑の基本計画における「石川沿い段丘崖の緑」の位置づけ〉、〈2. 「石川沿い段丘崖の緑」の詳細調査（1）調査対象地の位置、（2）石川段丘崖の緑・北部、

(3) 石川段丘崖の緑・南部〉、〈3. 保全施策の提案〉。

9. 中野町二丁目の石川段丘崖壁の竹林保全

上記の「自然環境保全活用調査」における、石川段丘崖の一つである中野町2丁目にあるマダケを中心とした竹林が、所有者の好意により、具体的な保全の検討が可能となった。そのためのより詳細な調査を、2月21日に実施し、市民と行政の協働による保全活動の検討を開始した。

10. 会議

2008年度(平成20年度)の役員会および総会を以下のように開催した。

(1) 役員会

- ① 4月16日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：傷害・賠償保険(年間行事)加入契約、作業小屋の契約継続(賃借料の支払い)年間活動計画(里山管理作業、自然観察会、自然環境の講座、国際ワークキャンプ、交流会、冊子「富田林の自然7」の発行、自然環境保全活用調査等)、自然環境保全活用調査委託契約。
- ② 5月21日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、自然環境活用調査の現地調査について。
- ③ 6月18日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、自然環境活用調査の現地調査について。
- ④ 7月16日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画。
- ⑤ 9月17日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、自然環境活用調査の現地調査について。
- ⑥ 10月15日(水) 午後7時～9時、201会議室、出席者人 内容：活動報告と事業計画。
- ⑦ 11月19日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、冊子「富田林の自然」の発行、自然環境活用調査について。
- ⑧ 12月17日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、冊子「富田林の自然」の発行、自然環境活用調査について。
- ⑨ 1月21日(水) 午後7時～9時、904会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、冊子「富田林の自然」の発行、自然環境活用調査について。
- ⑩ 2月18日(水) 午後7時～9時、201会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、冊子「富田林の自然」の発行、自然環境活用調査について。
- ⑪ 3月10日(火) 午後7時～9時、4F-B会議室、出席者5人、内容：活動報告と事業計画、冊子「富田林の自然」の発行、自然環境活用調査について、総会議案の討議。

(2) 総会

3月25日(水) 午後7時～9時、庁議室

錦織公園とその周辺の野鳥観察データ

上村 賢（日本野鳥の会大阪支部）

2008年12月1日現在

番号	目	科	標準和名	学名			2001～		
				属名	種小名	亜種名	確認	季節	備考
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	<i>Tachybaptus</i>	<i>ruficollis</i>	<i>pogei</i>	○	通年	普通
2	ペリカン	ウ	カワウ	<i>Phalacrocorax</i>	<i>carbo</i>	<i>hanedae</i>	○	通年	普通
3	コウノトリ	サギ	ヨシゴイ	<i>Ixobrychus</i>	<i>sinensis</i>	<i>sinensis</i>		春・秋	稀
4	コウノトリ	サギ	ゴイサギ	<i>Nycticorax</i>	<i>nycticorax</i>	<i>nycticorax</i>	○	通年	少ない
5	コウノトリ	サギ	ササゴイ	<i>Butorides</i>	<i>striatus</i>	<i>amurensis</i>	○	夏	少ない
6	コウノトリ	サギ	アマサギ	<i>Bubulcus</i>	<i>ibis</i>	<i>coromandus</i>	○	夏	少ない
7	コウノトリ	サギ	ダイサギ	<i>Egretta</i>	<i>alba</i>	<i>alba</i>	○	通年	多い
8	コウノトリ	サギ	チュウサギ	<i>Egretta</i>	<i>intermedia</i>	<i>intermedia</i>	○	夏	少ない
9	コウノトリ	サギ	コサギ	<i>Egretta</i>	<i>garzetta</i>	<i>garzetta</i>	○	通年	普通
10	コウノトリ	サギ	アオサギ	<i>Ardea</i>	<i>cinerea</i>	<i>jouyi</i>	○	通年	多い
11	カモ	カモ	オシドリ	<i>Aix</i>	<i>galericulata</i>		○	冬	少ない
12	カモ	カモ	マガモ	<i>Anas</i>	<i>platyrhynchos</i>	<i>platyrhynchos</i>	○	冬	普通
13	カモ	カモ	カルガモ	<i>Anas</i>	<i>poecilorhyncha</i>	<i>zonorhyncha</i>	○	通年	普通
14	カモ	カモ	コガモ	<i>Anas</i>	<i>crecca</i>	<i>crecca</i>	○	冬	普通
15	カモ	カモ	トモエガモ	<i>Anas</i>	<i>formosa</i>			冬	稀
16	カモ	カモ	ヨシガモ	<i>Anas</i>	<i>falcata</i>		○	冬	稀
17	カモ	カモ	オカヨシガモ	<i>Anas</i>	<i>strepera</i>	<i>strepera</i>	○	冬	普通
18	カモ	カモ	ヒドリガモ	<i>Anas</i>	<i>penelope</i>		○	冬	多い
19	カモ	カモ	アメリカヒドリ	<i>Anas</i>	<i>americana</i>		○	冬	稀
20	カモ	カモ	オナガガモ	<i>Anas</i>	<i>acuta</i>	<i>acuta</i>	○	冬	少ない
21	カモ	カモ	ハシビロガモ	<i>Anas</i>	<i>clypeata</i>		○	冬	少ない
22	カモ	カモ	ホシハジロ	<i>Aythya</i>	<i>ferina</i>		○	冬	少ない
23	カモ	カモ	キンクロハジロ	<i>Aythya</i>	<i>fuligula</i>		○	冬	少ない
24	カモ	カモ	ミコアイサ	<i>Mergus</i>	<i>albellus</i>			冬	稀
25	タカ	タカ	ミサゴ	<i>Pandion</i>	<i>haliaetus</i>	<i>haliaetus</i>	○	冬	稀

番号	目	科	標準和名	学名			2001～		
				属名	種小名	亜種名	確認	季節	備考
26	タカ	タカ	ハチクマ	<i>Pernis</i>	<i>apivorus</i>	<i>orientalis</i>	○	秋	稀
27	タカ	タカ	トビ	<i>Milvus</i>	<i>Migrans</i>	<i>lineatus</i>	○	通年	稀
28	タカ	タカ	オオタカ	<i>Accipiter</i>	<i>gentilis</i>	<i>fujivamae</i>	○	通年	少ない
29	タカ	タカ	ツミ	<i>Accipiter</i>	<i>gularis</i>	<i>gularis</i>	○	秋	稀
30	タカ	タカ	ハイタカ	<i>Accipiter</i>	<i>nisus</i>	<i>nisosimilis</i>	○	通年	少ない
31	タカ	タカ	ノスリ	<i>Buteo</i>	<i>buteo</i>	<i>japonicus</i>	○	冬	少ない
32	タカ	タカ	サシバ	<i>Butastur</i>	<i>indicus</i>		○	春・秋	稀
33	タカ	タカ	クマタカ	<i>Spizaetus</i>	<i>nipalensis</i>	<i>orientalis</i>		通年	稀
34	タカ	タカ	チュウヒ	<i>Circus</i>	<i>spilonotus</i>	<i>spilonotus</i>	○	冬	稀
35	タカ	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco</i>	<i>peregrinus</i>	<i>japonensis</i>	○	通年	少ない
36	タカ	ハヤブサ	チゴハヤブサ	<i>Falco</i>	<i>subbuteo</i>	<i>subbuteo</i>	○	秋	稀
37	タカ	ハヤブサ	チヨウゲンボウ	<i>Falco</i>	<i>tinnunculus</i>	<i>interstinctus</i>	○	冬	稀
38	キジ	キジ	キジ	<i>Phasianus</i>	<i>colchicus</i>	<i>robustus</i>	○	通年	少ない
39	ツル	クイナ	クイナ	<i>Rallus</i>	<i>aquaticus</i>	<i>indicus</i>		冬	稀
40	ツル	クイナ	ヒクイナ	<i>Porzana</i>	<i>fusca</i>	<i>erythrothorax</i>		夏	稀
41	ツル	クイナ	バン	<i>Gallinula</i>	<i>chloropus</i>	<i>indica</i>	○	通年	少ない
42	ツル	クイナ	オオバン	<i>Fulica</i>	<i>atra</i>	<i>atra</i>	○	冬	少ない
43	チドリ	チドリ	コチドリ	<i>Charadrius</i>	<i>dubius</i>	<i>curonius</i>		夏	稀
44	チドリ	チドリ	イカルチドリ	<i>Charadrius</i>	<i>placidus</i>	<i>japonicus</i>	○	通年	普通
45	チドリ	チドリ	シロチドリ	<i>Charadrius</i>	<i>alexandrinus</i>	<i>nihonensis</i>		通年	稀
46	チドリ	チドリ	ケリ	<i>Vanellus</i>	<i>cinereus</i>		○	通年	普通
47	チドリ	チドリ	タゲリ	<i>Vanellus</i>	<i>vanelus</i>			冬	稀
48	チドリ	シギ	クサシギ	<i>Tringa</i>	<i>ochropus</i>		○	冬	少ない
49	チドリ	シギ	タカブシギ	<i>Tringa</i>	<i>glareola</i>			春・秋	稀
50	チドリ	シギ	イソシギ	<i>Actitis</i>	<i>hypoleucos</i>		○	通年	普通
51	チドリ	シギ	ヤマシギ	<i>Scolopax</i>	<i>rusticola</i>		○	冬	稀
52	チドリ	シギ	タシギ	<i>Gallinago</i>	<i>gallinago</i>	<i>gallinago</i>	○	冬	少ない

番号	目	科	標準和名	学名			2001～		
				属名	種小名	亜種名	確認	季節	備考
53	チドリ	カモメ	ユリカモメ	<i>Larus</i>	<i>ridibundus</i>		○	冬	稀
54	チドリ	カモメ	セグロカモメ	<i>Larus</i>	<i>argentatus</i>	<i>vegae</i>	○	冬	稀
55	チドリ	カモメ	カモメ	<i>Larus</i>	<i>canus</i>	<i>kamtschatschensis</i>		冬	稀
56	チドリ	カモメ	ウミネコ	<i>Larus</i>	<i>crassirostris</i>			冬	稀
57	チドリ	カモメ	コアジサシ	<i>Sterna</i>	<i>albifrons</i>	<i>sinensis</i>		夏	少ない
58	ハト	ハト	キジバト	<i>Streptopelia</i>	<i>orientalis</i>	<i>orientalis</i>	○	通年	多い
59	ハト	ハト	アオバト	<i>Sphenurus</i>	<i>sieboldii</i>	<i>sieboldii</i>	○	春・秋	稀
60	カッコウ	カッコウ	ジュウイチ	<i>Cuculus</i>	<i>fugax</i>	<i>hyperythrus</i>		春・秋	稀
61	カッコウ	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus</i>	<i>canorus</i>	<i>telephonus</i>		春・秋	稀
62	カッコウ	カッコウ	ツツドリ	<i>Cuculus</i>	<i>saturatus</i>	<i>horsfieldi</i>	○	春・秋	少ない
63	カッコウ	カッコウ	ホトトギス	<i>Cuculus</i>	<i>poliocephalus</i>	<i>poliocephalus</i>	○	春・秋	少ない
64	フクロウ	フクロウ	アオバズク	<i>Ninox</i>	<i>scutulata</i>	<i>japonica</i>		夏	少ない
65	フクロウ	フクロウ	フクロウ	<i>Strix</i>	<i>uralensis</i>	<i>japonica</i>	○	夏	少ない
66	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus</i>	<i>indicus</i>	<i>jotaka</i>		夏	稀
67	アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ	<i>Apus</i>	<i>affinis</i>	<i>subfurcatus</i>	○	冬	稀
68	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	<i>Apus</i>	<i>pacificus</i>	<i>kurodae</i>	○	夏	少ない
69	ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	<i>Ceryle</i>	<i>lugubris</i>	<i>pallida</i>	○	冬	稀
70	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	<i>Alcedo</i>	<i>atthis</i>	<i>bengalensis</i>	○	通年	普通
71	キツツキ	キツツキ	アリスイ	<i>Jynx</i>	<i>torquilla</i>	<i>japonica</i>	○	冬	稀
72	キツツキ	キツツキ	アオゲラ	<i>Picus</i>	<i>awokera</i>	<i>awokera</i>		冬	稀
73	キツツキ	キツツキ	アカゲラ	<i>Dendrocopos</i>	<i>major</i>	<i>hondoensis</i>	○	冬	稀
74	キツツキ	キツツキ	コゲラ	<i>Dendrocopos</i>	<i>kizuki</i>	<i>ijimae</i>	○	通年	普通
75	スズメ	ヒバリ	ヒバリ	<i>Alauda</i>	<i>arvensis</i>	<i>japonica</i>	○	通年	普通
76	スズメ	ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo</i>	<i>rustica</i>	<i>gutturialis</i>	○	夏	普通
77	スズメ	ツバメ	コシアカツバメ	<i>Hirundo</i>	<i>daurica</i>	<i>japonica</i>	○	夏	少ない
78	スズメ	ツバメ	イワツバメ	<i>Delichon</i>	<i>urbica</i>	<i>dasyus</i>	○	夏	少ない
79	スズメ	セキレイ	キセキレイ	<i>Motacilla</i>	<i>cinerea</i>	<i>robusta</i>	○	通年	普通

番号	目	科	標準和名	学名			2001～		備考
				属名	種小名	亜種名	確認	季節	
80	スズメ	セキレイ	ハクセキレイ	<i>Motacilla</i>	<i>alba</i>	<i>lugens</i>	○	通年	普通
81	スズメ	セキレイ	セグロセキレイ	<i>Motacilla</i>	<i>grandis</i>		○	通年	普通
82	スズメ	セキレイ	ビンズイ	<i>Anthus</i>	<i>hodgsoni</i>	<i>hodgsoni</i>	○	冬	普通
83	スズメ	セキレイ	タヒバリ	<i>Anthus</i>	<i>spinoletta</i>	<i>japonicus</i>	○	冬	少ない
84	スズメ	サンショウウグイ	サンショウウグイ	<i>Pericrocotus</i>	<i>divaricatus</i>	<i>divaricatus</i>	○	春・秋	稀
85	スズメ	ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes</i>	<i>amaurotis</i>	<i>amaurotis</i>	○	通年	多い
86	スズメ	モズ	モズ	<i>Lanius</i>	<i>bucephalus</i>	<i>bucephalus</i>	○	通年	普通
87	スズメ	レンジャク	キレンジャク	<i>Bombycilla</i>	<i>garrulus</i>	<i>centralasiae</i>		冬	稀
88	スズメ	レンジャク	ヒレンジャク	<i>Bombycilla</i>	<i>japonica</i>		○	冬	稀
89	スズメ	ツグミ	コマドリ	<i>Erithacus</i>	<i>akahige</i>	<i>akahige</i>		春・秋	稀
90	スズメ	ツグミ	ノゴマ	<i>Luscinia</i>	<i>calliope</i>			春・秋	稀
91	スズメ	ツグミ	コルリ	<i>Luscinia</i>	<i>cyane</i>	<i>bochaiensis</i>		春・秋	稀
92	スズメ	ツグミ	ルリビタキ	<i>Tarsiger</i>	<i>cyanurus</i>	<i>cyanurus</i>	○	冬	普通
93	スズメ	ツグミ	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus</i>	<i>aurorus</i>	<i>aurorus</i>	○	冬	普通
94	スズメ	ツグミ	ノビタキ	<i>Saxicola</i>	<i>torquata</i>	<i>stejnegeri</i>	○	春・秋	少ない
95	スズメ	ツグミ	イソヒヨドリ	<i>Monticola</i>	<i>solitarius</i>	<i>philippensis</i>	○	通年	少ない
96	スズメ	ツグミ	トラツグミ	<i>Zoothera</i>	<i>dauma</i>	<i>aurea</i>	○	冬	少ない
97	スズメ	ツグミ	クロツグミ	<i>Turdus</i>	<i>cardis</i>		○	春・秋	少ない
98	スズメ	ツグミ	アカハラ	<i>Turdus</i>	<i>chrysolaus</i>	<i>chrysolaus</i>	○	春・秋	少ない
99	スズメ	ツグミ	シロハラ	<i>Turdus</i>	<i>pallidus</i>		○	冬	普通
100	スズメ	ツグミ	マミチャジナイ	<i>Turdus</i>	<i>obscurus</i>		○	春・秋	少ない
101	スズメ	ツグミ	ツグミ	<i>Turdus</i>	<i>naumanni</i>	<i>eunomus</i>	○	冬	多い
102	スズメ	ウグイス	ヤブサメ	<i>Urosphena</i>	<i>squameiceps</i>		○	夏	少ない
103	スズメ	ウグイス	ウグイス	<i>Gettia</i>	<i>diphone</i>	<i>cantans</i>	○	通年	多い
104	スズメ	ウグイス	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus</i>	<i>arundinaceus</i>	<i>orientalis</i>	○	夏	少ない
105	スズメ	ウグイス	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus</i>	<i>borealis</i>	<i>xanthodryas</i>	○	春・秋	少ない
106	スズメ	ウグイス	エゾムシクイ	<i>Phylloscopus</i>	<i>tenebripes</i>		○	春・秋	稀

番号	目	科	標準和名	学名			2001～		備考
				属名	種小名	亜種名	確認	季節	
107	スズメ	ウグイス	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus</i>	<i>coronatus</i>		○	春・秋	普通
108	スズメ	ウグイス	クワイタダキ	<i>Regulus</i>	<i>regulus</i>	<i>japonensis</i>	○	冬	少ない
109	スズメ	ウグイス	セッカ	<i>Cisticola</i>	<i>juncidis</i>	<i>brunniiceps</i>	○	通年	少ない
110	スズメ	ヒタキ	キビタキ	<i>Ficedula</i>	<i>narcissina</i>	<i>narcissina</i>	○	夏	普通
111	スズメ	ヒタキ	ムギマキ	<i>Ficedula</i>	<i>mugimaki</i>			春・秋	稀
112	スズメ	ヒタキ	オオルリ	<i>Cyanoptila</i>	<i>cyanomelana</i>	<i>cyanomelana</i>	○	春・秋	少ない
113	スズメ	ヒタキ	サメビタキ	<i>Muscicapa</i>	<i>sibirica</i>	<i>sibirica</i>	○	春・秋	稀
114	スズメ	ヒタキ	エゾビタキ	<i>Muscicapa</i>	<i>griseisticta</i>		○	春・秋	少ない
115	スズメ	ヒタキ	コサメビタキ	<i>Muscicapa</i>	<i>daurica</i>	<i>daurica</i>	○	春・秋	普通
116	スズメ	カササギヒタキ	サンコウチヨウ	<i>Terpsiphone</i>	<i>atrocaudata</i>	<i>atrocaudata</i>	○	春・秋	稀
117	スズメ	エナガ	エナガ	<i>Aegithalos</i>	<i>caudatus</i>	<i>trivirgatus</i>	○	通年	普通
118	スズメ	シジュウカラ	コガラ	<i>Parus</i>	<i>montanus</i>	<i>restrictus</i>		冬	稀
119	スズメ	シジュウカラ	ヒガラ	<i>Parus</i>	<i>ater</i>	<i>insularis</i>	○	冬	少ない
120	スズメ	シジュウカラ	ヤマガラ	<i>Parus</i>	<i>varius</i>	<i>varius</i>	○	通年	普通
121	スズメ	シジュウカラ	シジュウカラ	<i>Parus</i>	<i>major</i>	<i>major</i>	○	通年	多い
122	スズメ	メジロ	メジロ	<i>Zosterops</i>	<i>japonicus</i>	<i>japonica</i>	○	通年	多い
123	スズメ	ホオジロ	ホオジロ	<i>Emberiza</i>	<i>cioides</i>	<i>ciopsis</i>	○	通年	普通
124	スズメ	ホオジロ	ホオアカ	<i>Emberiza</i>	<i>fucata</i>	<i>fucata</i>		冬	稀
125	スズメ	ホオジロ	カシラダカ	<i>Emberiza</i>	<i>rustica</i>	<i>latifascia</i>	○	冬	少ない
126	スズメ	ホオジロ	ミヤマホオジロ	<i>Emberiza</i>	<i>elegans</i>	<i>elegans</i>	○	冬	稀
127	スズメ	ホオジロ	アオジ	<i>Emberiza</i>	<i>spodocephala</i>	<i>personata</i>	○	冬	普通
128	スズメ	ホオジロ	クロジ	<i>Emberiza</i>	<i>variabilis</i>		○	冬	少ない
129	スズメ	ホオジロ	オオジュリン	<i>Emberiza</i>	<i>schoeniclus</i>	<i>pyrrhulina</i>		冬	少ない
130	スズメ	アトリ	アトリ	<i>Fringilla</i>	<i>montifringilla</i>		○	冬	少ない
131	スズメ	アトリ	カワラヒワ	<i>Carduelis</i>	<i>sinica</i>	<i>minor</i>	○	通年	多い
132	スズメ	アトリ	マヒワ	<i>Carduelis</i>	<i>spinus</i>		○	冬	稀
133	スズメ	アトリ	ハギマシコ	<i>Leucosticte</i>	<i>arctoa</i>	<i>brunneonucha</i>	○	冬	稀

番号	目	科	標準和名	学名			2001～		備考
				属名	種小名	亜種名	確認	季節	
134	スズメ	アトリ	ベニマシコ	<i>Uragus</i>	<i>sibiricus</i>	<i>sanguinolentus</i>	○	冬	少ない
135	スズメ	アトリ	ウン	<i>Pyrrhula</i>	<i>pyrrhula</i>	<i>griseiventris</i>	○	冬	稀
136	スズメ	アトリ	イカル	<i>Eophona</i>	<i>personata</i>	<i>personata</i>	○	通年	普通
137	スズメ	アトリ	シメ	<i>Coccothraustes</i>	<i>Coccothraustes</i>	<i>japonicus</i>	○	冬	普通
138	スズメ	ハタオリドリ	ニュウナイスズメ	<i>Passer</i>	<i>rutilans</i>	<i>rutilans</i>	○	冬	少ない
139	スズメ	ハタオリドリ	スズメ	<i>Passer</i>	<i>montanus</i>	<i>saturatus</i>	○	通年	多い
140	スズメ	ムクドリ	コムクドリ	<i>Sturnus</i>	<i>philippensis</i>			春・秋	稀
141	スズメ	ムクドリ	ムクドリ	<i>Sturnus</i>	<i>cineraceus</i>		○	通年	多い
142	スズメ	カラス	カケス	<i>Garrulus</i>	<i>glandarius</i>	<i>brandtii</i>	○	冬	少ない
143	スズメ	カラス	ハシボソガラス	<i>Corvus</i>	<i>corone</i>	<i>orientalis</i>	○	通年	多い
144	スズメ	カラス	ハシブトガラス	<i>Corvus</i>	<i>macrorhynchos</i>	<i>japonensis</i>	○	通年	多い
145	キジ	キジ	コジュケイ	<i>Bambusicola</i>	<i>thoracica</i>	<i>thoracica</i>	○	通年	普通
146	ハト	ハト	カワラバト	<i>Columba</i>	<i>livia</i>		○	通年	普通
147	スズメ	チメドリ	ソウシチヨウ	<i>Leiothrix</i>	<i>lutea</i>		○	冬	稀

120 147 147

- * 日本野鳥の会宮城県支部作成の日本産鳥類リスト(http://www.geocities.jp/wbsj_miyagi/bird-list.html)を元に改編。
- * 確認欄の○印は、2001年以降の記録。○印のないものは、生息の記録があるもの、あるいは、生息の可能性があるものを示す。
- * 季節欄の用語の意味は、次のとおり。この地域を基準としているため、図鑑に記載されている「留鳥」「夏鳥」「冬鳥」とは異なる。

通年：この地域で年間を通じて確認することができ、繁殖している種。

夏：夏にこの地域で確認することができ、繁殖している種。

春・秋：この地域を春と秋に通過する種。

冬：この地域で越冬する種。

富田林の自然を守る市民運動協議会

富田林の自然を守る会
NPO法人里山倶楽部
石川あすかプランを考える市民連絡会 / 石川自然クラブ
富田林勤労者山岳会「嶽の会」
金剛の自然環境を守り育てる会
竜泉里山クラブ

オブザーバー
日本国際ワークキャンプセンター関西事務局

事務局
産業環境部みどり環境課
〒584-8511 富田林市常盤町1番1号
TEL 0721-25-1000（内431） FAX 0721-20-2072
e-mail midorikankyo@city.tondabayashi.osaka.jp

富田林の自然

2009年3月25日 発行
編集 富田林の自然を守る市民運動協議会
発行 産業環境部みどり環境課